

第4章 冬期の住まい方に関する実証実験

4-1 北海道中川町における実証実験

第2章の集落の冬期生活に関する対応方針に基づき、北海道中川町において、冬期の住まい方（冬期居住）に関する実証実験を実施した。実験の内容及び結果等を本節にて整理する。

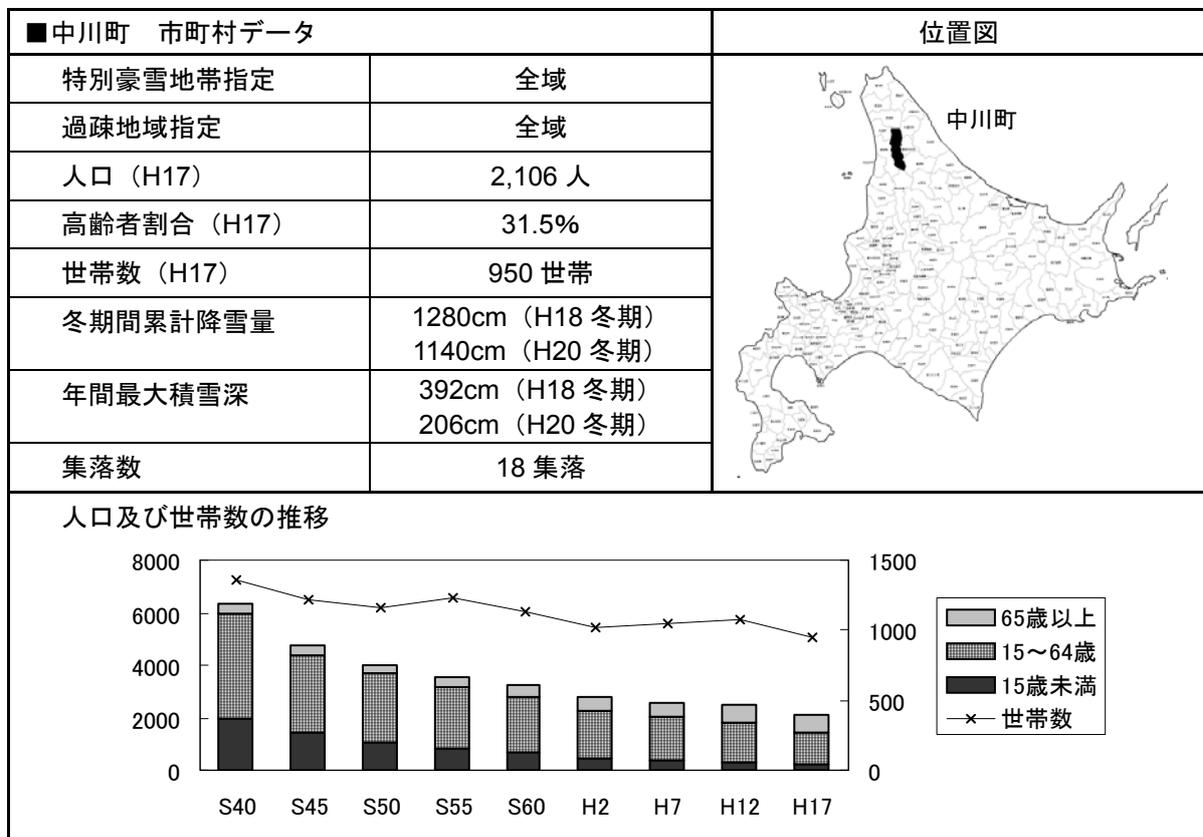
(1) 対象地域の状況

北海道中川町は、北海道の北部に位置し、東に北見山地、西に天塩山地が走っており、この両山地の中央を流れる天塩川とこれに合流する安平志内川流域に沿って南北に細長く拓けている。気候は日本海沿岸型に属し、全域が特別豪雪地帯に指定されており、寒さが厳しく積雪も多い。

中川町における住民への除雪支援の取組としては、酪農家や商店街の私有敷地に対して除雪費用の補助を行ってきたが、行政経費縮減の一環により、平成17年度に酪農家、平成19年度に商店街の除雪支援を廃止している。また、高齢者世帯等への支援としては、「介護予防・生活支援事業」の中で除雪サービス（軒先の雪かきなどを1回390円で実施）を提供している。集落内の生活道路や集会所、神社などの雪処理は自治会単位で実施している。

町内には路線バスがないため、公共交通の便が悪い地域には住民バス（無料）を通年運行している。役所、医療・福祉施設、教育施設（小中学校、高等学校）、商店等は、町の中心である中川地区に集中しており、このバスが集落住民の通院、通学、買い物等に利用されている。

図表 4-1 北海道中川町の概況



注)・人口、高齢者割合、世帯数は、平成17年国勢調査に基づく。

・冬期間累計降雪量及び年間最大積雪深（平成18年冬期、平成20年冬期）は、豪雪地帯基礎調査に基づく。

・集落数は、平成20年度豪雪地帯における集落の状況に関するアンケート調査に基づく。

実験の対象地区は、昨年度調査の経緯も考慮し、安川集落とした。安川集落は中川町の南側、道道 118 号線沿いにあり、町中心部から約 17km 離れている。現在は 30 人、9 世帯が居住しており（図表 4-2）、農林業の衰退と後継者不足のために人口の減少、高齢化率の上昇が進んでいる。

安川集落は住宅が分散して立地しており、各戸の敷地も広いため、自宅の除雪は自助が基本であり、近隣との共助による除雪作業は行われていない。大型トラクターを所有している農家は除雪用アタッチメントを持っているため、敷地内の除雪は比較的容易に行っている。自力での雪処理が困難な高齢者世帯は、町の費用支援を受けながら、高齢者事業団や民間業者に委託しており、受益者負担として 1 世帯あたり 1 シーズンで 2~5 万円が必要となっている。また、集会所や神社の除雪は、若い世代が交代で行っている。

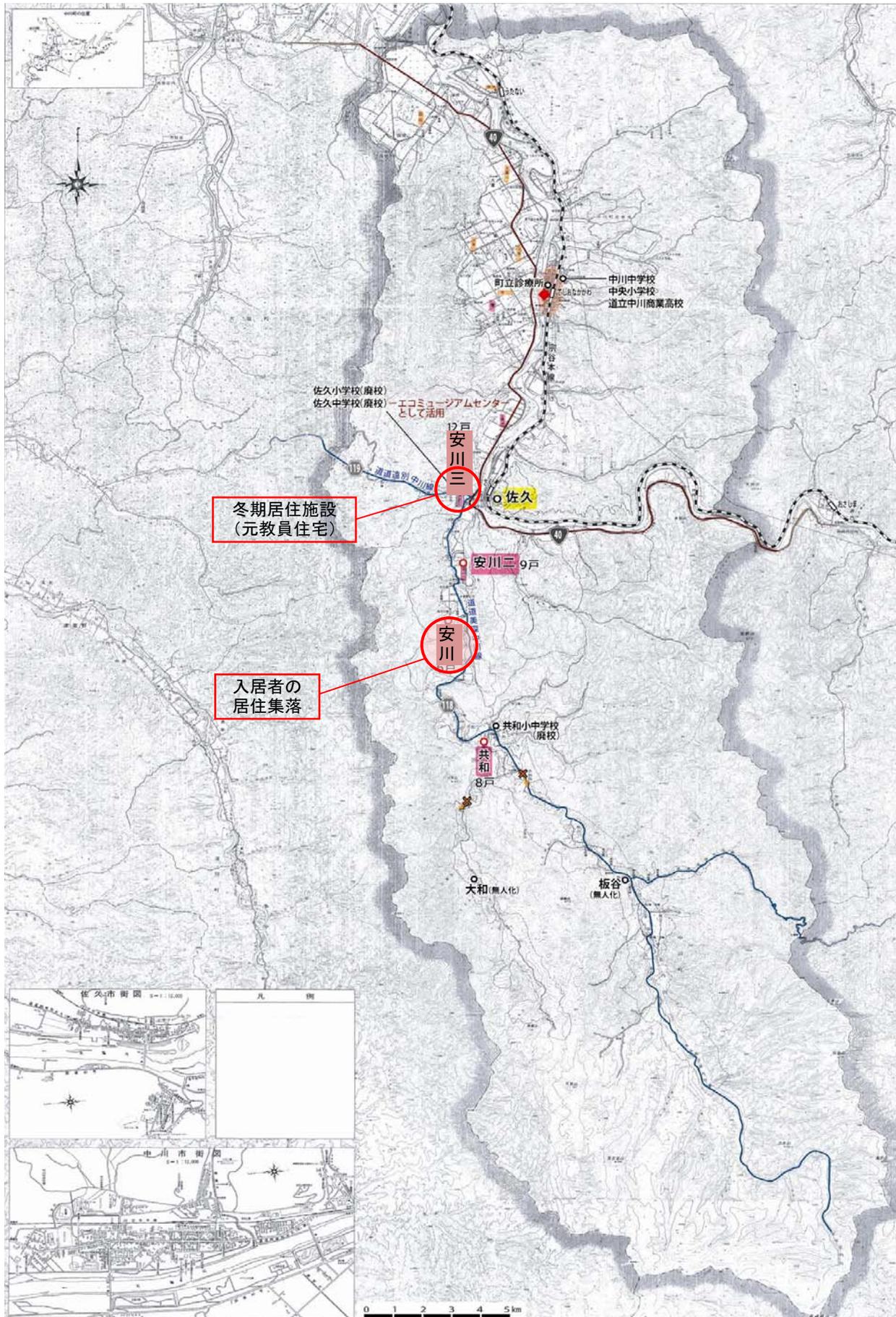
冬期は零下 25~30℃になる地域であるため、道路の凍結による転倒事故には注意が必要であり、高齢者は外出を控える傾向にある。

図表 4-2 中川町安川集落の概況

項目	安川集落
地域区分	中間地
集落類型	基礎集落
人口	30 人
高齢者割合	50.0%
世帯数	9 世帯
うち高齢者世帯数	4 世帯
平年の積雪量	約 200cm
市役所までの距離	約 17km

注) 上記は昨年度調査に基づく。

図表 4-3 中川町全図と安川集落の位置



(2) 実証実験の概要

① 本実験の趣旨

自宅の雪処理などに対する住民の不安を解消し、安全安心な冬の暮らしを快適に過ごすため、北海道中川町において、安川集落を対象に、住民が冬期の一定期間、まちなか周辺にある戸建ての遊休施設（元教員住宅）に移り住み、移住先の地域コミュニティ等と交流を図る。また、実験終了時には入居者へのアンケート調査及び座談会、行政ヒアリングを実施し、実験の効果や課題等を把握・検証する。

< 本実験の主な検証項目 >

- ・ 冬期居住に関する集落や地域住民との調整、合意形成のポイント
- ・ 冬期居住施設及び居住環境を整備する上でのポイント
- ・ 実施体制、連携体制のあり方
- ・ 雪処理の負担軽減効果、生活利便性の向上の具体的効果
- ・ 交流機会の増加に伴う精神的効果
- ・ 入居者及び行政の視点からみた冬期居住の評価
- ・ ウェブカメラを活用した留守宅管理の有効性
- ・ 今後の展開に向けた課題、方向性 等

② 冬期居住施設(実験施設)

中川町の実証実験では、安川三集落で遊休施設となっていた元教員住宅 2 棟（戸建て）を冬期居住施設として活用した。安川集落からは約 7km 離れており、町の中心部まではその分だけ近い。元教員住宅は全部で 4 棟あり、うち 1 棟は中川町が取り組んでいる「お試し居住」の生活体験用住宅として I ターン者（単身）が入居中である。

なお、安川三集落には、12 世帯、22 人が居住している。廃校になった中学校校舎を活用した中川町エコミュージアムセンター（自然誌博物館と宿泊型研修体験施設）があり、地域内外の学習・交流拠点として活用されている。

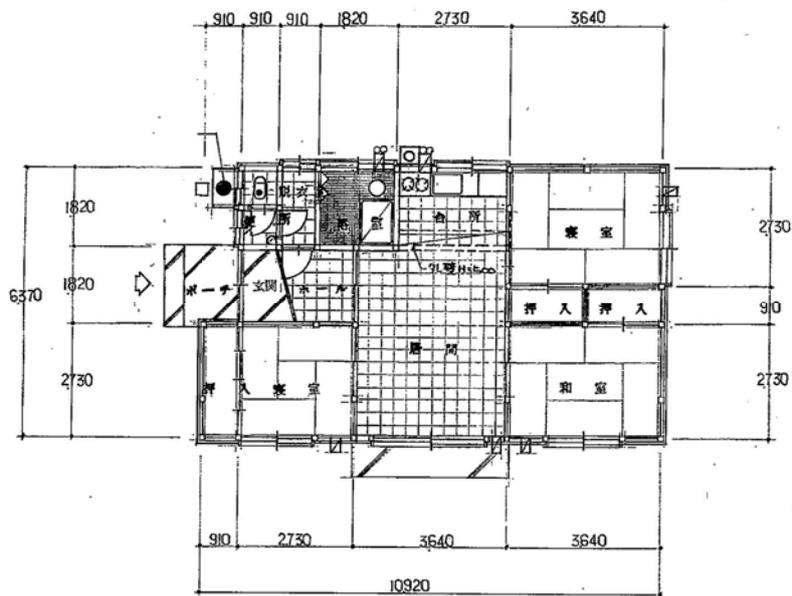
【冬期居住施設外観】



図表 4-4 冬期居住施設の配置



図表 4-5 冬期居住施設の間取り図



冬期居住施設として活用する元教員住宅は、近年は使用されていなかったため、実験の実施に際して施設内部の修繕（主に水道関係）及び清掃を行った。また、生活に必要な備品類が整備されていなかったため、レンタル等で準備した（図表 4-6）。

図表 4-6 冬期居住のために準備した備品類

種類	品名	備考
テレビ	29 型テレビ	
	テレビ台 (29 型)	
掃除機	家庭用掃除機	1.5 l
給湯機器	湯沸保温ポット	2.2 l
	電子ジャー	一升炊き
	電子レンジ	
冷蔵庫	2 ドア冷蔵庫 (180L)	500~940W
洗濯機	全自動洗濯機	
	乾燥機	4.2 kg
	乾燥機専用台	4.0 kg
ガスコンロ	2 口ガスコンロ グリル付き (LP)	
寝具	布団セット	

【冬期居住施設内部】



③入居者(実験参加者)

冬期居住実験には、安川集落から1世帯4名が参加し、親夫婦と息子夫婦でそれぞれ1棟ずつに入居した。全員が健康であり、母以外は自分で自動車を運転している。息子夫婦は自宅で農業を営んでいる。

- 親夫婦 : 父(80代)、母(80代)
- 息子夫婦 : 息子(50代)、嫁(50代)

④入居のための準備・条件整備

冬期居住実験に向けて、行政担当者、入居者、地元集落(区長)、民間業者等が協議・調整を図りながら、図表4-7のように事前準備及び条件整備を行った。

図表4-7 冬期居住のための準備・条件整備

項目	内容
実験期間	平成22年2月1日(月)~2月8日(月) 7泊8日
電話	入居者の自宅で使用している親子電話(fax兼用)を冬期居住施設へ持ち込み、NTT東日本の電話転送サービスで自宅の電話番号にかかってくる電話を転送する。
テレビ視聴料	安川三集落にはテレビ視聴のための共同アンテナがあり、入居者の視聴料(辺地共聴施設の組合費)を集落に支払う。 200円×2戸・・・400円
郵便・新聞	入居者が郵便局にて実験期間中の郵便転送の手続きを行う。 新聞も郵送されてくるため、同様の手続きで転送する。
食事・日用品	食事は入居者が自炊する。食材、生活で使用・消耗する日用品の購入は入居者が行う(費用は自己負担)。
保険	実験期間中、家族傷害保険(親夫婦・息子夫婦の2家族分)に加入する。 (死亡・後遺障害2,200万円、入院保険金日額12,000円、通院6,000円) ・親夫婦(自宅に戻らない) 保険料6,970円(2/1~2/8) ・息子夫婦(農作業で自宅に戻る) 保険料8,710円(2/1~2/8)
留守宅の雪処理	息子夫婦が農作業のために実験期間中も時々自宅に戻る必要があるため、その時に自分たちで留守宅の状況を確認し、必要に応じて除雪作業を行う。

⑤実施体制

中川町における冬期居住実験の実施体制は、**図表 4-8** のとおりであり、中川町が実施主体となって実験の企画、準備、関係組織・団体との調整、入居者への連絡、実験の実施・運営等を行った。また、交流の機会を創出するため、町内会、民生委員、社会福祉協議会、教育委員会など、様々な主体と連携している。

図表 4-8 中川町における冬期居住実験の実施体制

役割	組織・団体
実験全般（実施主体）	中川町総務課企画財政室
地域交流	安川三町内会
	中川町民生委員
	中川町社会福祉協議会（地域包括支援センター）
	中川町住民課幸福推進室
	中川町教育委員会（中川町エコミュージアムセンター）

(3) 実証実験の実施内容と経過

① 実験の実施内容

中川町における冬期居住実験は、図表 4-9 のような内容で実施した。特に、Web カメラを用いた留守宅の監視、冬期居住施設周辺の地域住民との交流会、保健師の立ち寄りが特徴的な取組となっている。

図表 4-9 中川町における冬期居住実験の内容

実験項目	内 容
i) 冬期居住施設の 転入・転出 (引っ越し)	<p>■入居者が冬期居住施設に転入し、実験期間終了後に転出する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親夫婦と息子夫婦に分かれて1棟ずつに入居する。 ・2月1日、入居者が生活に必要なものを持参し、自家用車で冬期居住施設への引っ越し作業を行う。 ・転出は2月8日午後に行う。
ii) 留守宅の監視	<p>■入居者の留守宅に Web カメラを設置し、入居者が冬期居住施設のパソコンから監視する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・冬期居住施設で ADSL が利用できるようにする。 ・実験期間までに入居者の留守宅に Web カメラを設置し、冬期居住施設のパソコンからカメラ画像が確認できるように設定する。 ・入居者は実験期間中、留守宅の状況を適宜監視する。
iii) 交流機会の創出	<p>■実験期間中、様々な交流の機会をつくる。</p> <p>[地域住民との交流]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安川三集会所において、施設周辺の地域住民と交流する機会（交流会）を設ける。 ・隣接する住宅に居住している1ターン者と日常的な交流を図る。 ・入居者（父）が実験期間中も地域の老人会に参加できるよう配慮する。また老人会の人々に冬期居住の話題を提供する。 ・入居者の知人等に冬期居住施設に立ち寄ってもらう。 <p>[保健師等による立ち寄り]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保健師が実験期間中に1回、冬期居住施設に立ち寄る。 ・行政職員が冬期居住施設に立ち寄る（ほぼ毎日）。
iv) 冬期居住施設の の雪処理	<p>■冬期居住施設の除雪作業を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・玄関前や施設周辺、駐車スペースの雪処理は、入居者が行う。 ・実験期間前に、町が民間業者に委託し、冬期居住施設の屋根及び周辺の除雪作業を行う。 ・実験期間中、冬期居住施設の雪下ろしが必要になった場合は、町が民間業者に雪処理作業を委託する。

②実験の実施経過

中川町における冬期居住実験の実施内容（前頁図表 4-9）にそって、実験期間中の主な経過を以下に整理する。

図表 4-10 実験期間における主な出来事（平成 22 年）

1月	29（金）	レンタル備品類の搬入
	30（土）	
	31（日）	
2月	1（月）	【実験開始】 全員：入居者転入（午前）
	2（火）	父母：町立診療所にてインフルエンザ検診 嫁：エコミュージアムの行事参加（午前・午後）
	3（水）	
	4（木）	
	5（金）	父：老人クラブ会合・健康体操（午前） 父：交通安全講習会（午後） 父母：保健師の訪問（午後）
	6（土）	息子夫婦：市街地を徒歩でまわる（午前）
	7（日）	息子：留守宅の除雪（午前） 全員：地域交流会（夜）
	8（月）	全員：アンケート調査票への記入（午前） 全員：入居者座談会（午前） 全員：入居者転出（午後） 【実験終了】
	9（火）	行政ヒアリング（中川町）
	10（水）	レンタル備品類の搬出

i) 冬期居住施設の転入・転出

平成 22 年 2 月 1 日午前、入居者が自ら自家用車を使って引っ越しを行い、親夫婦と息子夫婦に分かれて、それぞれ冬期居住施設に入居した。自家用車は 2 台持ち込む（父と息子が運転）。自宅から持参したものは主に以下のとおりである。

- ・野菜類、肉類、飲料
- ・電気オーブン、菓子づくり道具一式
- ・CD ラジカセ、CD
- ・ノートパソコン
- ・植木
- ・猫（ペット）
- ・スノーシュー

実験期間が終了した 2 月 8 日午後、転入時と同様、入居者は自家用車で自宅に戻った。



ii) 留守宅の監視

実験期間までに入居者の留守宅（室内）に Web カメラを設置し、ADSL 回線を利用して、入居者が冬期居住施設のパソコンから監視できるように整備した。Web カメラの角度を遠隔操作することができる。照明装置もあるため、夜間でも画像を確認することができた。入居者はほぼ毎日、このシステムを利用して留守宅の様子を監視した。実験期間中、留守宅に特に異常はみられなかった。



iii) 交流機会の創出

○地域住民との交流会の開催

2月7日の17時から、冬期居住施設の近隣にある安川三集会所において、入居者と地域住民との交流会を開催し、入居者4人、安川三集落及び佐久地区住民8人、行政職員6人など合計20人程度が出席した。入居者からは冬期居住の体験を語ったり、地元住民からは地域の様々な話をうかがうなど、普段はあまり交流する機会のない地区の住民等と交流を深めることができた。集会所での交流会の終了後、希望者は冬期居住施設に移動して歓談を続けた。



○保健師等による立ち寄り

2月3日14時頃及び5日15時30分頃、保健師が親夫婦の居住する施設を訪問した。二人の血圧や脈拍を測定したり、普段の生活や健康状態などを問診したり、健康維持のアドバイスを行ったりした。ちなみに親夫婦は、息子夫婦と同居しており、病院の受診も町外で受けているため、これまで保健師の定期的な訪問は受けていない。

実験期間中には、町職員やエコミュージアムの職員、社会福祉協議会の職員等がたびたび立ち寄り、冬期居住施設の住み心地や生活の様子、趣味などについて話をした。



○その他の交流の機会

2月2日、同じ集落内にあるエコミュージアムセンターで料理教室が行われ、嫁が参加し、そこで作ったお菓子を近隣の同じ元教員住宅に住むIターン者にお裾分けし、そのお返しをもらおうといった新しい「近所付き合い」が生まれた。

また、2月5日には隣の地区で行われた老人クラブの例会（毎月実施）に父が出席し、冬期居住の体験について話題提供を行った。その他にも、健康体操に参加したり、高齢者向けの交通安全講習会に出席したりした。



iv) 冬期居住施設の雪処理

実験期間中は、毎朝30分から1時間程度、父と息子がスノーダンプやスコップを使って玄関前と駐車スペース、住宅間の通路の除雪を行った。また、施設の奥の建物にはIターン者が居住しており、これまでは1人で玄関前から道路までの通路を人力で除雪していたが、冬期居住期間中は負担がかなり軽減されたということである。



v) その他

○住民バスの利用、徒歩での外出

2月4日には、嫁が住民バスで初めて外出した。往復とも住民バスを利用して町の中心部まで移動し、買い物等を行った。

2月6日には、息子夫婦が自家用車で移動し、市街地近くに自家用車をおいて、市街地を歩いて回った。積雪した道路を歩いて店舗や公共施設などを回ることで、自家用車のない生活になった場合の状況を体験した。立ち寄った運動施設や店舗等では、顔見知りの方と出会い、冬期居住の体験などを話題に歓談していた。



○留守宅の除雪

2月7日には、帰宅を前に息子が留守宅の除雪作業を行った。冬期居住の期間中、留守宅は除雪しなかったため、積雪は60～70cm程度あり、玄関先や車庫前を人力で除雪するとともに、道路から玄関前及び車庫までは除雪機械で除雪し、3時間近くかけて作業を行った。



(4) 実証実験の結果

① 入居者アンケート調査の結果

中川町における冬期居住実験の入居者を対象に、実験の効果、当初の不安、実験内容の満足度、今後の意向等を把握するため、以下のとおり、アンケート調査を実施しており、その結果について以下に整理する。

【調査概要】

- ・ 調査日時：平成 22 年 2 月 8 日 午前
- ・ 調査方法：冬期居住施設にて入居者に調査票を配布し、その場で回答・回収した。
(調査員が適宜説明)
- ・ 調査対象：冬期居住施設の入居者 4 人
- ・ 回収数：4 人

【アンケート調査結果の要点】

- ・ 実験期間の長さ（1 週間）は、「適当だった」が 2 人、「長かった」、「短かった」がともに 1 人。入居者にとっては、概ね適度な期間設定であったといえる。
- ・ 実験への参加理由は、「今後、家族（子ども等）を安心させる必要があるため」が 2 人と多かった。
- ・ 実験による効果は、「冬期間（積雪時）の通院が楽になった」及び「冬期間（積雪時）の買い物が楽になった」が顕著であり、ともに「十分に効果があった」が 1 人、「やや効果があった」が 3 人となっている。一方、留守宅の雪処理支援や食事の提供等は今回の実験で行っていないため、「自宅の除雪作業について不安から解放された」、「しっかりとした食事がとれるようになった」については、効果は実感されていない。
- ・ 実験に向けた当初の不安は、「自宅を留守にしている間の雪処理」及び「自宅を留守にしている間の防犯」において、「やや不安」が 3 人であり、留守宅の維持管理が大きな不安要因となっている。
- ・ 実験の全体的な満足度は、「やや満足」が 3 人、「どちらともいえない」が 1 人であった。
- ・ 今回の冬期居住施設に関する満足度は総じて高く、「部屋の設備・備品」及び「部屋の使いやすさ」で「やや不満」が 1 人みられるにとどまった。
- ・ 実験内容に関する満足度は、「地域住民との交流」が 4 人とも「満足」であり、大変好評であった。また、「民生委員、保健師等との交流」、「Web カメラによる留守宅の見守り」も満足度が比較的高かった。
- ・ 今後冬期居住を行う場合に必要な取組・サービスとしては、「今住んでいる集落以外の人との交流」、「民生委員、保健師等の訪問」、「自宅（留守宅）の管理・確認」、「自宅（留守宅）の雪処理」に対するニーズが高い。
- ・ 将来的な冬期居住への意向はあまり高くない。冬期居住を行うと仮定した場合の 1 カ月当たりの入居料（1 人分、食費・光熱費除く）は 1 万円までが 3 人、3 万円までが 1 人であり、食事サービスを受ける場合の金額も概ね 1 日 3 食で 1,000 円以内となっている。

【入居者アンケートの集計結果 (N=4)】

問1 実験期間の長さはどうだったか

長かった	1	(25.0%)
適当だった	2	(50.0%)
短かった	1	(25.0%)
合計	4	(100.0%)

問2 実験に参加した理由 (複数回答)

今後、自宅の除雪作業が困難になるため	0	(0.0%)
今後、冬期間自宅で過ごすことが不安になるため	0	(0.0%)
今後、通院が大変になるため	0	(0.0%)
今後、買い物が大変になるため	0	(0.0%)
今後、家族 (子ども等) を安心させる必要があるため	2	(50.0%)
その他	2	(50.0%)
	4	(100.0%)

【その他の内容】

- ・興味があったから

問3 実験による効果

	十分に効果があった	やや効果があった	どちらともいえない	あまり効果がなかった	全く効果がなかった	合計
①自宅の除雪作業についての不安から解放された	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (50.0%)	0 (0.0%)	2 (50.0%)	4 (100.0%)
②冬期間 (積雪時) の通院が楽になった	1 (25.0%)	3 (75.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
③冬期間 (積雪時) の買い物が楽になった	1 (25.0%)	3 (75.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
④冬の閉じこもりがちな生活によるさびしさや不安が解消された	1 (25.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	2 (50.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
⑤しっかりとした食事がとれるようになった	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (75.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)

問4 実験に向けた不安

	とても不安	やや不安	どちらともいえない	あまり不安ではなかった	全く不安ではなかった	無回答	合計
①自宅を留守にしている間の雪処理	0 (0.0%)	3 (75.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	4 (100.0%)
②自宅を留守にしている間の防犯	0 (0.0%)	3 (75.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	4 (100.0%)
③ご先祖（仏壇など）をおいて家を空けること	0 (0.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	4 (100.0%)
④他人と一緒に共同生活を送ること							
⑤居住施設への引っ越し、荷物の搬入	1 (25.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	4 (100.0%)
⑥居住施設の設備、備品の用意	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (50.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)	4 (100.0%)
⑦居住施設の雪処理	0 (0.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	2 (50.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	4 (100.0%)
⑧家族や親族の理解、協力	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)	4 (100.0%)
⑨食事の用意	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)	4 (100.0%)
⑩実験（冬期居住）に伴う金銭的な負担	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (50.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)	4 (100.0%)
⑪通院や買い物などの外出の手段	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (50.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)	4 (100.0%)

問5 実験の全体的な満足度

満足	0	(0.0%)
やや満足	3	(75.0%)
どちらともいえない	1	(25.0%)
やや不満	0	(0.0%)
不満	0	(0.0%)
合計	4	(100.0%)

問6 居住施設に関する満足度

	満足	やや満足	どちらともいえない	やや不満	不満	合計
①施設の場所・位置	2 (50.0%)	2 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
②住みやすさ（快適性）	2 (50.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
③部屋の広さ	3 (75.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
④部屋の設備・備品	2 (50.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
⑤部屋の使いやすさ	2 (50.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)

問7 各実験内容に関する満足度

	満足	やや満足	どちらとも いけない	やや不満	不満	合計
①地域住民との交流	4 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
②民生委員、保健師等との 交流	2 (50.0%)	1 (25.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
③Web カメラによる 留守宅の見守り	2 (50.0%)	0 (0.0%)	2 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
④留守宅の雪処理	2 (50.0%)	0 (0.0%)	2 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
⑤住民バスの利用	0 (0.0%)	1 (25.0%)	3 (75.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
⑥宅配サービス (買い物サービス)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
⑦実験施設の雪処理	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (50.0%)	2 (50.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)

問8 冬期居住を行う場合、必要な取組・サービス

	必要	やや必要	どちらとも いけない	あまり 必要ない	必要ない	無回答	合計
①自宅（留守宅）の管理・ 確認	3 (75.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	4 (100.0%)
②自宅（留守宅）の雪処理	3 (75.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
③居住施設の雪処理	1 (25.0%)	3 (75.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
④居住施設内の共同 スペースの設置	1 (25.0%)	1 (25.0%)	2 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
⑤今住んでいる集落の人と の交流	2 (50.0%)	0 (0.0%)	2 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
⑥今住んでいる集落以外の 人との交流	4 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
⑦民生委員、保健師等の 訪問	4 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
⑧食事の提供	0 (0.0%)	1 (25.0%)	2 (50.0%)	0 (0.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
⑨外出時の支援サービス (移送・相乗り)	2 (50.0%)	2 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
⑩買い物サービス (宅配・代行・移動販売)	2 (50.0%)	2 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
⑪自宅への一時帰宅	2 (50.0%)	2 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)

問9 将来、一冬を通じて冬期居住したいか

ぜひ冬期居住したい	0	(0.0%)
自宅での冬の生活が体力的に困難になったら冬期居住したい	1	(25.0%)
条件が合えば冬期居住したい	0	(0.0%)
わからない	1	(25.0%)
冬期居住はしない	2	(50.0%)
合計	4	(100.0%)

【「冬期居住はしない」理由】

- ・通年居住という考え方もある。
- ・冬期だけの居住は、引っ越しの手間や生活環境の変化に慣れるのにストレスがかかるため、いっそのこと生活の基盤を街中においた方がよいと感じた。

問10 1ヶ月当たりの入居料（1人分、ただし食費・光熱費は除く）

1万円まで	3	(75.0%)
2万円まで	0	(0.0%)
3万円まで	1	(25.0%)
5万円まで	0	(0.0%)
それ以上	0	(0.0%)
合計	4	(100.0%)

問11 食事サービスを受ける場合の朝昼夜1回当たりの費用（1人分）

	200円まで	300円まで	500円まで	800円まで	1,000円まで	それ以上	計
【朝食】の場合	3 (75.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
【昼食】の場合	1 (25.0%)	2 (50.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)
【夕食】の場合	1 (25.0%)	2 (50.0%)	1 (25.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (100.0%)

問12 自由記入

- ・仕事エリアから離れた位置に居住することで、住まうという意味や暮らすことの新しい切り口が見えた。
- ・実験に参加して、自分の老後を真剣に考えることができた。また、いろいろな人との交流が毎日の生活を楽しいものにしてくれることを実感した。自宅に戻ってからは、10年後の実際の生活目標に向けて、環境を整えていきたいと考えている。

②入居者座談会の結果

中川町における冬期居住実験の入居者を対象に、実験期間中の行動、実験の満足度・効果、将来の冬期居住の意向、今回の経験を踏まえた提案等を把握するため、以下のとおり、座談会（ヒアリング）を実施しており、その結果について以下に整理する。

【調査概要】

- ・調査日時：平成22年2月8日 13:00～14:15
- ・調査方法：冬期居住施設にて入居者に座談会形式でヒアリングを実施した。
- ・調査対象：冬期居住施設の入居者 4人



【入居者座談会の要旨】

i) 実験の満足度、効果

〔留守宅の管理、除雪について〕

○留守宅の雪はそのままにして居住施設に入居したため、施設の屋根から雪が落ちた時には留守宅の雪が気になった。

〔外出、買い物について〕

○通院や買い物などの移動は、距離が短くなるのでその分楽になる。

○JAの宅配サービスは、宅配日のタイミングが合わず、利用しなかった。

〔交流について〕

○安川集落にいと、距離が遠いこともあり、人と交流する機会があまりなかったが、居住施設には歩いて行ける範囲に地域の集会所やエコミュージアムセンターがあるなど、色々な人と交流することができた。

○近隣の居住者（Iターン者）に手作りのお菓子などをあげたり、そのお返しをもらったりするなどのやりとりが生活の励みになった。

〔施設での生活について〕

○施設のレイアウトや台所、洗濯機等の備品など、普段自宅で使い慣れているものと異なるため、使い勝手が悪く大変だった。

○普段と環境が変わり、2、3日はなかなか眠れなかった。

○風呂はお湯をためてもすぐに冷めるため、朝、シャワーを使うようにしていた。

○風呂場の入り口の段差、風呂場と浴槽の底との段差が大きく危険である。

〔施設の除雪について〕

○自宅では機械で除雪をしているが、冬期居住施設では人力での除雪作業であり、特に高齢者には負担が大きかった。

ii) 実験への当初の心配と実験後の感想

○自宅は住まいとして今後も使うため、留守宅の維持管理に不安が大きかった。
○実験に参加してみて、親子で同居しているのが一番いいと改めて感じた。

iii) 必要と考えられる取組やサービス

○Web カメラで屋外の状況も分かるようであれば、自宅に戻る回数も減るのではないかと。
○社会福祉協議会の職員や保健師が来てくれると安心感がある。

iv) 将来の冬期居住への意向

○今後も冬期居住する場合のことを考えると、毎冬引っ越しをすることのストレスは大きく、気が重くなる。
○冬期居住するのであれば、自動車の運転ができるうちに行い、居住先の地域で人との交流の接点をつくっておいた方がいい。高齢になってからの冬期居住の不安も少なくなると思う。
○中川町で生活する以上、自動車は不可欠であり、冬期居住施設等に移住して自動車で畑に通う暮らし方もありうると気付いた。
○子どもがいたときであれば、冬期居住施設に住むことで、子どもの学校への送迎が不用となり、効果をもっと実感できたと思う。
○自分たちのことを考えると、年齢的なこともあり、冬期だけではなく通年で移住した方がいいのではないかと。
○冬の暮らしに困ってから子どもを頼って他の地域へ移住した場合、地域との接点がないため、あまりいい思いをしないのではないかと。

v) 今後の取組に向けた提案、課題

○今回の施設で各部屋に1世帯ずつ住み、1棟で他の世帯と共同生活を営むのは厳しい。
○特に高齢者の一人暮らしなどの場合は、コミュニケーションを深めるためにも、一戸建てではなく、バリアフリーにした集合住宅の方がいいのではないかと。例えば、寮のような形式であれば、除雪をする必要はなく、食事の提供も受けられるようにするといいいのではないかと。
○普段は遊びに行き来することは少ないが、共同して住むことで気軽に立ち寄ることができる。
○今回の話が地域で少しずつ広まり、他の住民にとっても、今後の生き方を考えるきっかけになるといい。
○実験を通じて役場の人と話す機会が多かったが、普段からこのような機会があると、住民がどのようなことを考えているのか分かりやすくなるのではないかと。

vi) その他

○住民バスを利用したり、徒歩で町中を歩いたりしてみたが、自動車での外出とは異なり、時間を気にしながら行動する必要があり、制限や不便を実感した。
○歩道に除雪した雪が残されていたり、車道と歩道間の雪など、高齢者が歩くには大変だった。
○近隣に居住するIターン者は、これまでは1人で道路までの通路を除雪していたため、除雪をする人が増えて、作業が楽になったと喜んでいました。

③行政ヒアリングの結果

冬期居住に関する問題、改善点、行政からみた効果、今後の課題・方向性等を把握するため、実験期間終了後、行政担当者に対してヒアリングを実施しており、その結果について以下に整理する。

【行政ヒアリングの要旨】

i) 地域住民に対する冬期居住実験への参加協力時の支障

- 雪があるからこそ自宅を離れることに不安を抱く。実験の中で留守宅の見守りをするとしても、その具体的な方法が提示されて本人が納得しない限り難しい。
- 冬期居住したとしても自宅の雪下ろしが心配になる。
- 実験の必要性や将来的な可能性は理解しても、住民自身は現時点で冬期居住の必要はなく、自宅で生活ができるため、自分のこととして考えることが難しく、一時的であっても自ら移り住むには至らない。
- 北海道では、親やその親などが開拓してきたという思いがあるため、後継者がいないからといって簡単に手放せない心情もあるのではないかと。

ii) 実験で苦勞した点、問題点、改善点

- 今回の居住施設は定住対策（お試し居住）でも活用しているため、比較的簡単に実験が遂行できると考えていたが、初めてのことであり、予想以上に大変だった。
- 実験の趣旨からすると、もっと町の中心部に移住してもらった方がよかったが、適当な施設や空き家がほとんどなく難しかった。
- 特に高齢者が移住する場合、電気、ガス、水道、電話などの様々な手続きを自分ですべて行うことは負担が大きく、ワンストップでできる窓口や機関等があるといい。
- 冬期居住期間でも生活環境は著しく変わらないように、居住施設の環境を準備してきた。
- 入居者の引っ越しに伴うストレスが大きく、それを軽減するためにはある程度お金をかけてしっかりと準備をしないといけない。
- 冬期居住施設において配水管が破裂しているなど、予想以上に修繕を要した。

iii) 市町村としての実験の成果・効果

- 実験が終了し、今回の入居者を通じて、実験の内容や効果が地域で広がっていくことを期待している。
- これまでも「冬期だけ町中の公営住宅に来れば」という話を住民にしたことがあるが、実際に実験を行ってみて、そんなに簡単なことではないと分かった。

iv) 施策として検討・展開していく上での課題

- 町の中心部に移ってもらうのも一つだが、周辺の集落などに移ってもらい、それらを補完するため交通や情報などを充実させるという考え方もある。
- 各世代でニーズの違いはあると思うが、冬期居住した後の生活にやりがいを見出せるかが重要になってくるのではないかと。
- 冬の不安感が冬のやりがいへと変わっていくようにできるといい。
- 興味を持っている住民はいると思う。今回の実験を契機に今後町に冬期居住の希望が寄せられる可能性もあり、行政としてそのときの対応を考えておく必要がある。
- エコミュージアムセンターを活用するなどして、夏期は別荘のような形で使ってもらい、冬期には冬期居住施設として使う方法もあるのではないかと。

v) 望まれる支援制度

- 住宅を貸すためには施設の修繕が必要であり、そのための支援メニューがあるといい。
- 国の支援制度は金額が大きいので、下限金額の低いメニューがあるといい。

(5) 実証実験の成果と今後の課題・方向性

中川町で実施した冬期居住の実証実験について、本節で整理した内容に基づき、入居者、地域コミュニティ、行政のそれぞれの立場から成果（効果等）を整理すると、図表4-11に示すとおりである。

図表4-11 各主体の立場からみた実証実験の成果

主体	効果・メリット等	大変さ・デメリット等
入居者	<ul style="list-style-type: none"> ・居住地が町の中心部に近づいたことで、外出（通院、買い物等）が楽になった。 ・これまであまり接する機会がなかった様々な人と会話したり、交流することができた。 ・近隣の居住者との日常的な交流が生活の励みになった。 ・Webカメラを活用すれば留守宅をある程度監視できることがわかった。 ・子ども（孫）と同居している時であれば、中学校への送迎が不用になるなどの効果が得られた（現在は別居）。 ・ペット（犬）と花を持ち込むことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・引っ越しの負担（特に心理面）が大きい。毎年行うのは相当大変である。 ・留守宅の雪処理は自分たちで行ったが、誰かに頼むとしても不安は残る。 ・施設のレイアウト、台所や洗濯機などが、普段使い慣れているものと異なる。 ・普段と環境が変わり、最初はなかなか眠れなかった。 ・風呂場に段差があり、使い勝手が悪かった。 ・冬期居住施設の人力による除雪作業が大変だった（普段は機械で除雪）。
地域コミュニティ	<ul style="list-style-type: none"> ・入居者との会話・交流を通して、冬期居住という考え方や生活の様子を知ることができた。 	—
行政	<ul style="list-style-type: none"> ・遊休施設（元教員住宅）の新たな活用方法を見出すことができた。 ・元教員住宅2棟を冬期居住できる環境に整備することができた。 ・冬期居住を実施するためのノウハウを蓄積することができた。 ・冬期居住の実践事例ができ、地域で広める際に大いに役立つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員からの説明のみでは、冬期居住について地域住民から理解・協力を得るのは難しい。 ・遊休施設を冬期居住施設として活用する場合は相応の費用がかかる（改修費、清掃費、除雪費等）。 ・条件のいい場所には適当な施設がない。

また、本実験を通して、冬期居住のあり方や進め方等について検討する上で、次のような知見を得ることができた。

<冬期居住に関する主な知見>

- ・住民は雪があるからこそ、冬期に自宅を離れることに抵抗感があり、留守宅の見守りや雪処理は実験の中で対応すると説明してもなかなか賛同してくれなかった。
- ・冬期居住の期間であっても、入居者が希望するときに自宅の様子を見に行けるような配慮が必要である。
- ・入居者においては引っ越しや居住環境の変化に伴う負担やストレスがある。したがって、冬期居住施設においても、入居者が日常生活を送る上で過度な不便が生じないように、居住環境（内装、水まわり、家電製品、暖房器具、備品類等）をしっかりと整備する必要がある。

- 立地条件のよい（中心部に近い等）場所で冬期居住することで、生活の利便性も向上する。
- 冬期居住を実施する場合は、入居者の交流機会を増やす取組と一体的に展開することが、入居者にとっても地域コミュニティにとっても効果的である。
- 保健師、民生委員、医師、行政職員などによる訪問、会話、健康確認が望ましい。
- 冬期居住施設が一戸建てで1世帯ずつ入居する場合、寮や集合住宅で共同生活を送る場合と比べて、ペットや植物などを持ち込めるという利点がある。また、玄関先などの日々の除雪作業は必要であり、克雪住宅でない場合は雪下ろしも必要となる。
- Webカメラを活用した留守宅の監視は、入居者の不安を解消する上で有効である。
- 地域の高齢者に対しては、将来に備えて、自分で自動車の運転ができるうちに冬期居住を体験し、居住先で様々な交流の接点を作るように施策展開ができるとよい。
- 冬期居住期間における入居者の「生きがい」や「やりがい」も創出できるとよい。

今回の冬期居住実験において、中川町が最も苦労した点は入居者（実験協力者）の確保である。住民は冬期に自宅を離れることに不安がある。冬期居住についても、取組の必要性は理解しても、自宅で生活ができている人にとっては、自分の問題として認識することは難しく、一時的な期間であつても移り住むには至らない。

しかし今回の冬期居住実験により、一つの実践事例ができた。これは住民と冬期居住の意義や可能性を共有する上で有益な情報となる。しかも入居者本人が自分の体験として語ることで、住民に対する説明力は一層増すであろう。

中川町では、次年度以降も今回の方法で冬期居住を実施するかどうかはまだ検討段階であるが、入居者を通じて今回の実験の内容や効果が地域で広がっていくことを期待している。また、今回の入居者は2世代で同居していることもあり、今後の冬期居住の意向はそれほど高くないが、中川町では高齢者世帯が確実に増えており、地域の潜在的なニーズはあると考えられる。

中川町は今回の実験を通して、先述のとおり、冬期居住を実施するための知見やノウハウを蓄積することができた。また、元教員住宅2棟を冬期居住できる環境に整備することもできた。当面の課題は、冬期居住についての意義を地域住民に理解していただくことである。また、冬期居住施設として活用した元教員住宅の近くには、旧佐久小学校舎があり、こちらの既存施設も冬期居住施設として活用するなど、戸建て型と集合型の2つのタイプを一体的に実施・展開することも可能性として考えられる。

4-2 長野県大町市美麻地区における実証実験

第2章の集落の冬期生活に関する対応方針に基づき、長野県大町市美麻地区において、冬期の住まい方（冬期居住）に関する実証実験を実施した。実験の内容及び結果等を本節にて整理する。

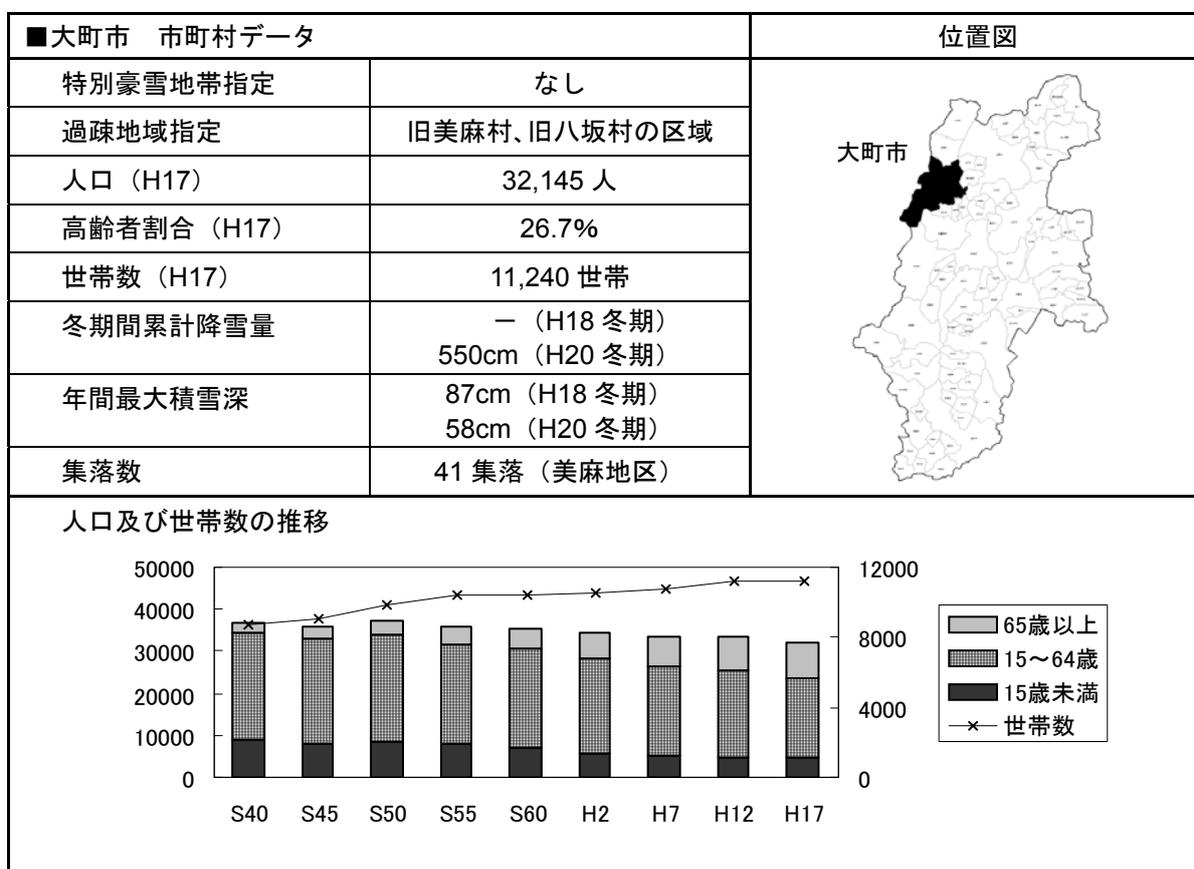
(1) 対象地域の状況

長野県大町市は、長野県の北西部に位置し、西部一帯に北アルプス山岳を連ね、市街地の標高は700m余りで、典型的な内陸性の気候である。平成18年1月1日に旧美麻村・旧八坂村と合併し、新大町市が誕生している。

実証実験の対象地域である美麻地区（旧美麻村の区域）は、大町市の東部、小川村や白馬村に隣接し、気温の日格差や年格差が激しく、平均気温は12℃、人口は1,160人、世帯数は433世帯（平成19年10月1日現在）である。市町村合併によって、過疎化が進行した集落が活性化から取り残されることのないように、美麻地区では自治会及び地区内の活動団体から構成される地域自治組織を設立し、コミュニティの維持や地域活性化に取り組んでいる。

美麻地区では、克雪住宅（落雪型）ではない住宅が多く、これらの世帯では年に2～3回の雪下ろしが必要であり、ほとんどが自助で雪処理を行っている。しかし、自力で雪処理できない高齢者世帯等では、業者に委託しているところもある。要援護世帯については、民生委員や社会福祉協議会が雪処理を支援しているが、山間地の集落では除雪道路から自宅玄関先まで距離があるため、高齢化の進行で道付け作業に苦勞している世帯も出始めている。

図表4-12 長野県大町市の概況



注）・人口、高齢者割合、世帯数は、平成17年国勢調査に基づく。

・冬期間累計降雪量及び年間最大積雪深（平成18年冬期、平成20年冬期）は、豪雪地帯基礎調査に基づく。

・集落数は、平成20年度豪雪地帯における集落の状況に関するアンケート調査に基づく。

美麻地区では、合併を契機にコミュニティバスの運行サービスが強化され、大町市街地とは1日5便で結ばれている。しかし美麻地区には診療所しかなく、大町市街地にある総合病院への通院の足としては、不便と感じている住民も多い。

美麻地区には46集落あり、すべてが30世帯以下の小規模な集落である。平成19年10月時点では、10世帯以下の集落が29(62%)であり、そのうち5世帯以下の集落が11(23%)、さらに2世帯のみの集落が3(6.5%)、1世帯のみの集落が4(8.7%)となっている。

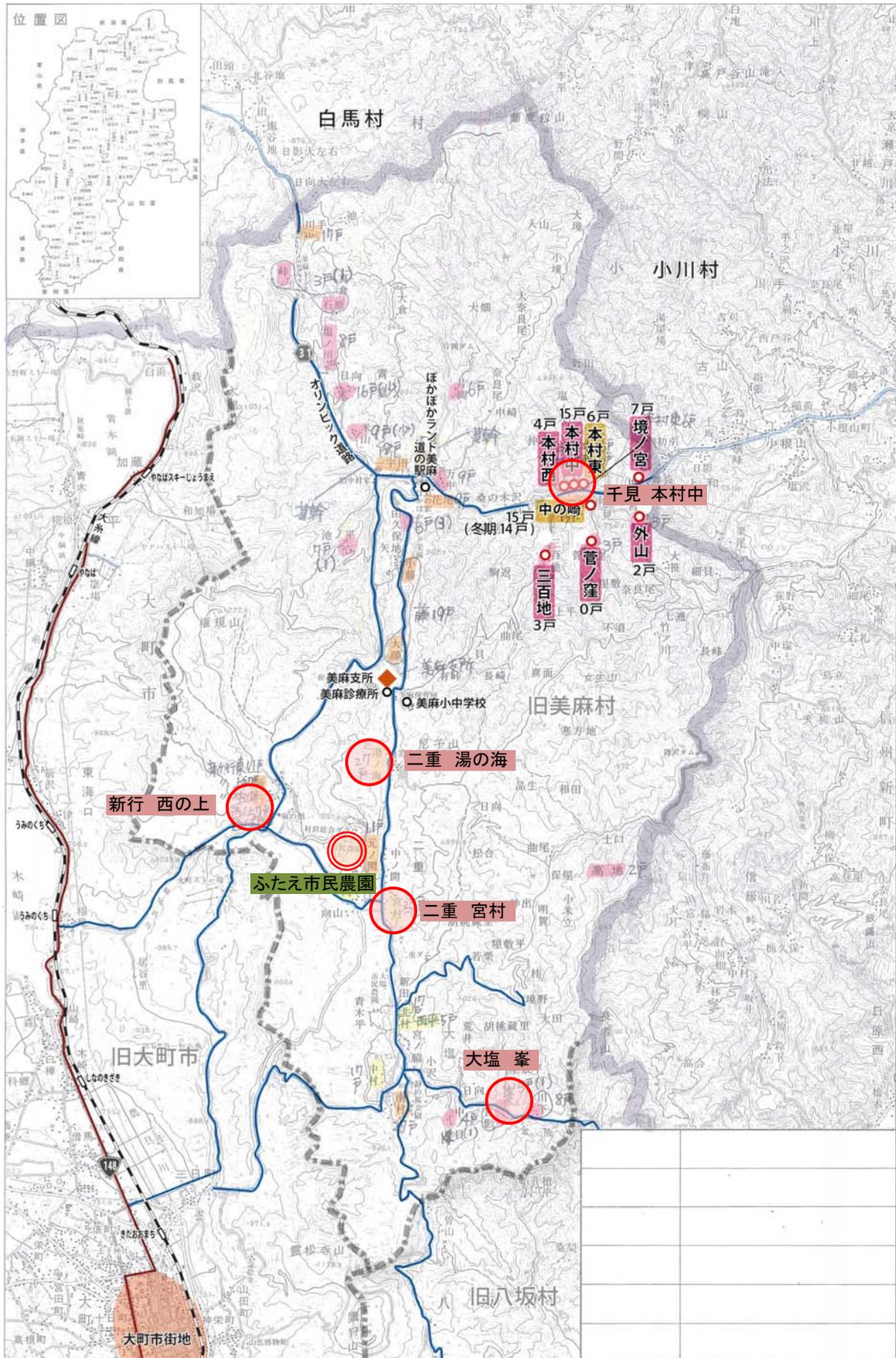
美麻地区における冬期居住実験では、行政担当者が各集落及び地域住民と協議・調整した結果、**図表4-13**及び**図表4-14**に示す5つの集落を対象として実施することとした。

図表4-13 入居者の居住集落の概況

集落名	本村中	峯	新行西の上	宮村	湯ノ海
地域区分	中間地	山間地	平地	中間地	中間地
集落類型	基礎集落	基礎集落	基礎集落	基礎集落	中心集落
地形的に末端にある集落	末端でない	末端にある	末端でない	末端でない	末端でない
本庁までの距離	19 km	12 km	10 km	10 km	13 km
常時交通確保路線までの距離	0.2~1km 未満	0.2km 未満	0.2~1km 未満	1~2km 未満	1~2km 未満
人口 (H18.4)	35 人	9 人	18 人	68 人	64 人
世帯数 (H18.4)	16 世帯	5 世帯	7 世帯	25 世帯	27 世帯
高齢化率 (H18.4)	25.7%	66.7%	44.4%	19.1%	32.8%

注) 上記は昨年度調査に基づく。

図表 4-14 大町市美麻地区全図と入居者の居住集落の位置



(2) 実証実験の概要

① 本実験の趣旨

自宅の雪処理などに対する住民の不安を解消し、安全安心な冬の暮らしを快適に過ごすため、長野県大町市美麻地区において、住民（複数世帯）が冬期の一定期間、雪処理の必要がない交流施設（ふたえ市民農園交流促進センター、閑散期）に移り住み、共同生活を送る。また、留守宅の見守りや食事の提供を併せて行う。実験終了時には入居者へのアンケート調査及び座談会、行政ヒアリングを実施し、実験の効果や課題等を把握・検証する。

< 本実験の主な検証項目 >

- ・ 冬期居住に関する集落や地域住民との調整、合意形成のポイント
- ・ 冬期居住施設及び居住環境を整備する上でのポイント
- ・ 実施体制、連携体制のあり方
- ・ 雪処理の負担軽減効果、生活利便性の向上の具体的効果
- ・ 交流機会の増加に伴う精神的効果
- ・ 共同生活、施設の共有スペース、食事提供による効果
- ・ 入居者及び行政の視点からみた冬期居住の評価
- ・ 今後の展開に向けた課題、方向性 等

② 冬期居住施設(実験施設)

大町市美麻地区の実証実験では、二重地区にあるふたえ市民農園交流促進センター（管理棟）を冬期居住施設として活用した。ふたえ市民農園は、大町市の中心部から約 10km の位置にあり、交流促進センターには、食堂、売店、大浴場、宿泊室兼研修室、大会議室が整備されている。宿泊室はトイレ付 8 畳が 6 室で、1 泊 2 食 6,500 円から宿泊が可能であり、仕切りを外して最大 4 室分までを 1 室として会議や研修などに利用することもできる。大浴場は午後 2 時から午後 8 時まで入浴料金 200 円で一般の利用も可能である。

冬期間は市民農園の利用者も減少するため、交流促進センターの利用者も減少し、宿泊の利用者も極めて少ない。したがって今回の実験は、施設の閑散期を利用した取組でもあり、既存施設の通年を通した効率的な利用を図るという意義もある。

【冬期居住施設（ふたえ市民農園交流促進センター）外観】



図表 4-15 冬期居住施設の配置

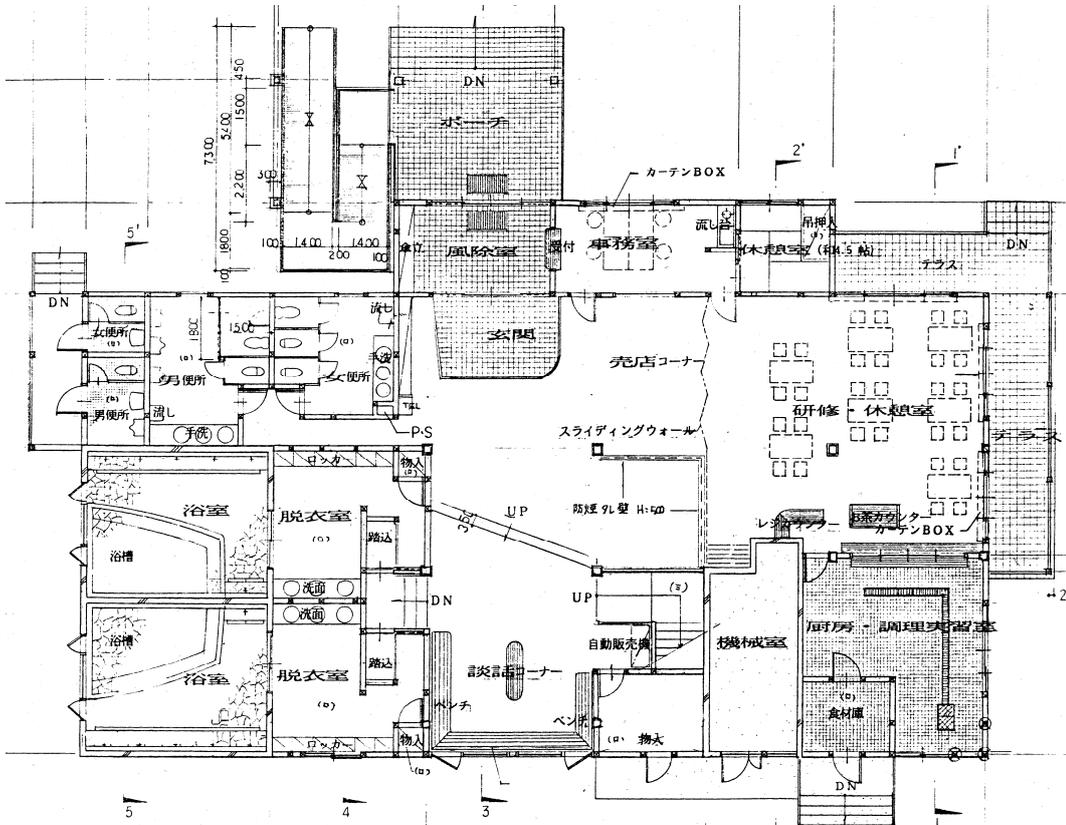


【ふたえ市民農園】

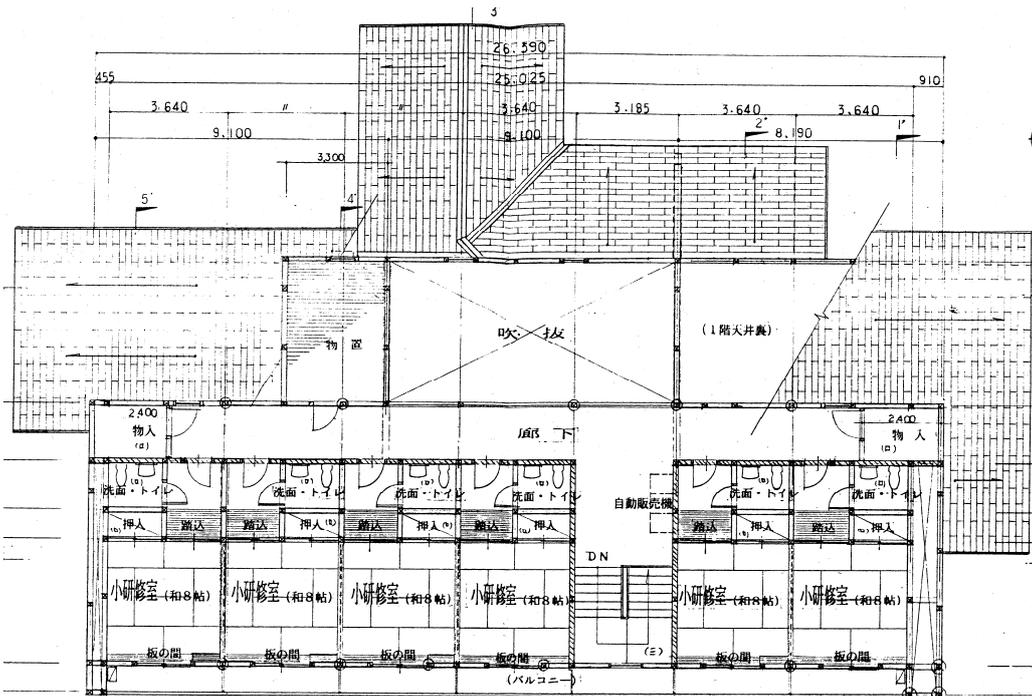


図表 4-16 冬期居住施設の間取り図

【1階間取り図】



【2階間取り図】



冬期居住施設として活用する交流促進センターは、宿泊は可能であるものの、高齢者の日常生活の場としては特に考慮されていないため、実証実験の実施に際して施設内部の改修（主に手すり設置など）を行った。また、生活に必要な備品類が不足していたため、レンタル等で準備した（図表 4-17）。

図表 4-17 冬期居住のために準備した備品類

種類	品名	備考
テレビ	20 型テレビ	
	テレビ台	
掃除機	掃除機	
給湯機器	電気ポット	2.2 L
	炊飯器	1.8 L
	電子レンジ	
冷蔵庫	冷蔵庫（220L）	
洗濯機	全自動洗濯機	4.2 kg
暖房器具	電気こたつ	900×900
（その他） <ul style="list-style-type: none"> ・ 布団、電気毛布、座布団、湯のみ、ごみ箱、お茶、暖房器 ・ 自炊用道具（なべ、フライパン、ざる、ボール、まな板、包丁） ・ 各種調味料 ・ 物干し、洗剤 		

【冬期居住施設内部】



③入居者(実験参加者)

大町市における冬期居住実験には、美麻地区内の5集落から5世帯6名が参加し、各世帯で宿泊室1室ずつに入居した。全員がおおむね健康であり、80代女性の1名を除いて自分で自動車を運転している。

○入居者5世帯6名

- ・千見地区 本村中 : 80代、女性
- ・大塩地区 峯 : 70代、男性
- ・新行地区 西の上 : 70代、男性
- ・二重地区 宮村 : 70代、男性
- ・二重地区 湯ノ海 : 60代、男性+女性(夫婦)

④入居のための準備・条件整備

冬期居住実験に向けて、行政担当者、入居者、居住施設(交流促進センター)管理者、民間業者等が協議・調整を図りながら、図表4-18のように事前準備及び条件整備を行った。

図表4-18 冬期居住のための準備・条件整備

項目	内容
実験期間	平成22年2月15日(月)~2月24日(水) 9泊10日
電話	入居者個人の携帯電話にて対応(全員)した。
郵便・新聞	美麻地区の文書配達員(市臨時職員)が毎日午後、入居者の自宅の郵便物と新聞を回収し、入居者に届ける。
食事・日用品	食事は1日2食(朝・夕)を施設で調理して提供し、入居者は提供を受けた分の食費(1食につき、朝食200円、夕食300円)を負担する。 昼食は、各自で準備する。 食事(朝・夕)以外で各自が消費する食品、日用品などの交流は入居者がそれぞれ行う(費用は自己負担)。
保険	実験期間中、国内旅行傷害保険(実験開始日から2週間)に加入する。 (死亡・後遺障害3,071万円、入院保険金日額8,000円、通院4,000円) ・入居者6人分の合計保険料 15,000円
留守宅の雪処理	入居者が居住する集落の自治会等の協力により、毎日朝夕の2回、留守宅の見回りをし、町に状況を報告する。必要に応じて入居者に状況を伝えたり、玄関先等の簡単な雪処理作業を行う。

⑤実施体制

大町市美麻地区における冬期居住実験の実施体制は、**図表 4-19** のとおりであり、大町市美麻支所が実施主体となって実験の企画、準備、関係組織・団体との調整、入居者への連絡、実験の実施・運営等を行った。

図表 4-19 大町市美麻地区における冬期居住実験の実施体制

役割	組織・団体
実験全般（実施主体）	大町市美麻支所総務民生課
冬期居住施設	ふたえ市民農園交流促進センター
交流	美麻地域づくり会議
	大町市社会福祉協議会

(3) 実証実験の実施内容と経過

① 実験の実施内容

大町市における冬期居住実験は、図表 4-20 のような内容で実施した。特に、自治会等の協力による留守宅の管理・雪処理、朝夕食の提供サービス、保健師の立ち寄りが特徴的な取組となっている。

図表 4-20 大町市における冬期居住実験の内容

実験項目	内 容
i) 冬期居住施設の 転入・転出 (引っ越し)	<p>■入居者が冬期居住施設に転入し、実験期間終了後に転出する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設の宿泊室(8畳)1室に1世帯ずつ入居する。 ・2月15日午後、入居者が実験期間中の生活に必要なものを持参し、自家用車で冬期居住施設への引っ越し作業を行う。 ・自家用車で引っ越しができない入居者(1世帯)は、市が自動車で搬送する。 ・転出は2月24日午後に行う。
ii) 留守宅の管理・ 雪処理	<p>■居住者の留守宅の状況を確認・把握するとともに、実験期間中の留守宅まわりの雪処理を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入居者の地元自治会及び地域住民の協力を得て、毎日朝夕2回、入居者の留守宅を見回り、必要に応じて玄関先等の簡単な除雪作業を行う(ただし雪下ろしは行わない)。 ・見回りの結果は大町市美麻支所にて随時把握・記録し、適宜入居者に伝達する。 ・雪下ろしが必要になった場合は、大町市福祉課の除雪支援サービスにより対応する。
iii) 交流機会の創出	<p>■実験期間中、様々な交流の機会をつくる。</p> <p>[保健師等による立ち寄り]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保健師が実験期間中に2回立ち寄り、入居者の健康状態の確認、血圧測定、健康体操などを行う。 ・行政職員が冬期居住施設に立ち寄る(適宜)。 <p>[地域住民との交流]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ふたえ市民農園交流促進センターを通常利用している方と交流する。 ・入居者の知人等が冬期居住施設に立ち寄る。
iv) 食事サービス	<p>■実験期間中の食事を提供し、健康的な生活を支援する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1日2食(朝夕)、冬期居住施設にて調理・提供し、居住者は提供を受けた分の費用(朝食200円、夕食300円)を負担する。 ・民間のお弁当配達サービスを実験期間中3回夕食に利用する。 ・昼食は各自で準備するが、希望者には上記配食サービスを提供する(1食600円)。
v) 冬期居住施設の 管理・運営	<p>■実験期間中の冬期居住施設を管理・運営する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・美麻地域づくり会議が施設の管理(雪処理含む)・運営を行う。 ・通常の施設管理・運営とは別に、冬期居住のための担当(日勤・宿直)を配置する。

②実験の実施経過

大町市における冬期居住実験の実施内容（前頁図表 4-20）にそって、実験期間中の主な経過を以下に整理する。

図表 4-21 実験期間における主な出来事（平成 22 年）

2 月	15（月）	【実験開始】 入居者転入（午後）
	16（火）	
	17（水）	保健師による健康相談（10:00～11:00）
	18（木）	入居者同士の外食（昼食）
	19（金）	入居者同士の昼食づくり
	20（土）	
	21（日）	
	22（月）	社会福祉協議会による住民支え合いマップ説明会（18:30～19:45）
	23（火）	保健師による健康相談（午前） 診療所医師による健康相談（午後） アンケート調査票への記入（午後）
	24（水）	入居者座談会（午前） 入居者転出（午後） 【実験終了】 行政ヒアリング（大町市美麻支所）

i) 冬期居住施設の転入・転出

平成 22 年 2 月 15 日午後、入居者が自ら自家用車を使って引っ越しを行い、それぞれ冬期居住施設に入居した。自家用車での引っ越しができない入居者（1 世帯）は、市職員が自動車を運転して、引っ越し作業を手伝った。入居者が自宅から持参した主なものは、以下のとおりである。

- ・衣類（着替え）
- ・洗面道具
- ・敷布
- ・薬
- ・茶、コーヒー、牛乳、カップ、急須
- ・菓子、果物類
- ・酒類
- ・パソコン、プリンタ
- ・書類（仕事関係）
- ・日記帳



実験期間が終了した 2 月 24 日午後、転入時と同様、入居者は自家用車で自宅に戻り、自家用車での引っ越しができない入居者は、市職員が自動車を運転して引っ越しを手伝った。

ii) 留守宅の管理・雪処理

入居者の地元自治会の協力を得て、近所の住民が毎日朝夕 2 回、留守宅の見回りを行い、異常はないか、雪の積もり方はどうかを確認した。見回りの結果は大町市美麻支所にて報告を受け、適宜入居者に伝えている。また、入居者によっては、外出した際に併せて留守宅に戻り状況を確認することもあった。

降雪の状況によっては、近所の住民が見回りの際に玄関先等の簡単な除雪作業を行う予定だったが、実験期間中は降雪量が少なかったため、雪処理は行われなかった。

iii) 交流機会の創出

○保健師等による立ち寄り

2月17日及び23日の10時頃、保健師が冬期居住施設を訪問した。両日とも入居者6人全員が参加して、血圧測定、頭の体操、健康体操、生活習慣病の予防の説明、食品サンプルを使った栄養クイズ等を1時間程度行った。



2月23日の午後には、診療所の医師と看護師が冬期居住施設を訪問した。居住者3名の血圧を測定し、普段の生活や冬期居住での生活について話を聞き、健康相談や生活のアドバイスなどを行った。

市職員も適宜施設に立ち寄り、入居者から冬期居住施設での生活状況、昔からの地域の風習や文化などについて話を聞いた。



○地域住民との交流

実験期間中、冬期居住施設は、宿泊はできないものの通常通り交流促進センターとして開館していたため、大浴場を利用する地域住民や市民農園の利用者がおり、居住者は知人などを見つけると立ち話をしたり、共同スペースや各自の個室などで歓談したりした。中には施設で入居者と一緒に食事をしたり、入居者の部屋で宿泊をしていく人もいた。

○社会福祉協議会による住民支え合いマップ説明会

2月22日18時30分から1時間程度、社会福祉協議会職員3名が施設を訪問し、住民支え合いマップの説明会を開催した。入居者6名の他に、民生委員5名、市職員1名が参加し、社会福祉協議会職員から、住民支え合いマップの必要性や内容、活用方法等の説明を受けていた。終了後には希望者で交流会を開いた。



○入居者同士の交流

2月19日、交流促進センターのIH調理器を利用して、入居者4人で一緒に昼食を作った。IH調理器の使用経験のある人が使い方を教えながら調理し、できあがった料理を全員で食べた。



2月18日は、入居者同士で外食（昼食）に出かけた。前日の夕食時に話し合い、当日は5名が参加して、居住者の自家用車1台に全員が同乗した。

また、入居者の家族が施設を訪問、宿泊していくこともあった。



iv) 食事サービス

実験期間中の朝食及び夕食は、原則として冬期居住施設にて調理・提供し、入居者は利用した分の食費の一部を負担した（朝食 200 円、夕食 300 円）。また、民間の配食サービスも期間中 3 回夕食に利用した。昼食は各自で準備することになっており、最初のうちは各自で昼食をとっていたが、3 日目以降は入居者が自分たちで調理するなどして、一緒に食事をとることが多くなった。



v) 冬期居住施設の管理・運営

冬期居住施設の管理（雪処理含む）は、美麻地域づくり会議（美麻地区の団体や個人等で構成する地域自治組織、交流促進センターの管理・運営を実施）が担当した。冬期居住施設は実験期間中も交流促進センターとして休館日を除き営業しており、入浴等で一般の方も利用するため、通常の施設管理・運営とは別に、冬期居住のための担当（日勤・宿直）を配置する勤務態勢をとった（図表 4-22）。

図表 4-22 実験期間中の交流促進センターの勤務態勢

内容	形態	勤務時間
通常業務	日勤	10 時～20 時
居住支援	日勤	7 時～19 時
居住支援	宿直	19 時～7 時
居住支援（調理）	日勤	6 時 30 分～9 時、17 時～20 時



(4) 実証実験の結果

① 入居者アンケート調査の結果

大町市美麻地区における冬期居住実験の入居者を対象に、実験の効果、当初の不安、実験内容の満足度、今後の意向等を把握するため、以下のとおり、アンケート調査を実施しており、その結果について以下に整理する。

【調査概要】

- ・ 調査日時：平成 22 年 2 月 23 日 午後
- ・ 調査方法：冬期居住施設にて、調査票をもとに入居者に 1 人ずつ聞き取りを行った。
- ・ 調査対象：冬期居住施設の入居者 5 世帯
- ・ 回収数：5 世帯

【アンケート調査結果の要点】

- ・ 実験期間の長さ（10 日間）は、「適当だった」が 4 人、「短かった」が 1 人。入居者にとっては、概ね適度な期間設定であったといえる。
- ・ 実験への参加理由は、「今後、自宅の除雪作業が困難になるため」が 3 人、「今後、冬期間自宅で過ごすことが不安になるため」が 2 人と多かった。
- ・ 実験による効果は、「冬の閉じこもりがちな生活によるさびしさや不安が解消された」及び「しっかりとした食事がとれるようになった」といった健康面での効果が顕著であり、ともに「十分に効果があった」が 4 人、「やや効果があった」が 1 人となっている。一方、実験期間中に通院した人はいなかったため、「冬期間（積雪時）の通院が楽になった」はどちらともいえないが 4 人である。買い物も自宅で生活する場合とそれほど変わらない人が多く、「冬期間（積雪時）の買い物が楽になった」ではどちらともいえないが 3 人であった。
- ・ 実験に向けた当初の不安は、「自宅を留守にしている間の雪処理」及び「ご先祖（仏壇など）をおいて家を空けること」で、「やや不安」が 2 人であり、長期間自宅を空けることが不安要因となっている。
- ・ 実験の全体的な満足度は、5 人とも「満足」であった。
- ・ 今回の冬期居住施設に関する満足度は総じて高く、いずれも「満足」あるいは「やや満足」であった。
- ・ 実験内容に関する満足度も全体的に高く、「やや不満」「不満」はみられない。今回の実験ではほとんど機会のなかった「留守宅の雪処理」と「外出の支援（相乗り、送迎）」では、「どちらでもない」という回答が多かった。
- ・ 今後冬期居住を行う場合に必要な取組・サービスとしては、「居住施設内の共同スペースの設置」、「今住んでいる集落の人との交流」、「今住んでいる集落以外の人との交流」、「民生委員、保健師等の訪問」に対するニーズが高い。
- ・ 将来的な冬期居住への意向はやや高く、「冬期居住はしない」、「わからない」という回答はなかった。冬期居住を行うと仮定した場合の 1 カ月当たりの入居料（1 人分、食費・光熱費除く）は「2 万円まで」が 2 人、「1 万円まで」「3 万円まで」「5 万円まで」がそれぞれ 1 人である。食事サービスを受ける場合の金額は 1 日 3 食で概ね 1,000 円前後となっている。

【入居者アンケートの集計結果 (N=5)】

問1 実験期間の長さはどうだったか

長かった	0	(0.0%)
適当だった	4	(80.0%)
短かった	1	(20.0%)
合計	5	(100.0%)

問2 実験に参加した理由 (複数回答)

今後、自宅の除雪作業が困難になるため	3	(60.0%)
今後、冬期間自宅で過ごすことが不安になるため	2	(40.0%)
今後、通院が大変になるため	0	(0.0%)
今後、買い物が大変になるため	0	(0.0%)
今後、家族 (子ども等) を安心させる必要があるため	1	(20.0%)
その他	1	(20.0%)
	5	

問3 実験による効果

	十分に効果があった	やや効果があった	どちらともいえない	あまり効果がなかった	全く効果がなかった	合計
①自宅の除雪作業についての不安から解放された	3 (60.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	5 (100.0%)
②冬期間 (積雪時) の通院が楽になった	1 (20.0%)	0 (0.0%)	4 (80.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
③冬期間 (積雪時) の買い物が楽になった	1 (20.0%)	1 (20.0%)	3 (60.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
④冬の閉じこもりがちな生活によるさびしさや不安が解消された	4 (80.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
⑤しっかりとした食事がとれるようになった	4 (80.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)

【その他の効果】

- ・結果的に買い物の必要がなかった。
- ・多くの初対面の人などに会えた。
- ・人と接し、会話ができたこと。
- ・こんなにゆっくりと話し合うことはなかったので、人との交流が楽しく、よかった。

問4 実験に向けた不安

	とても不安	やや不安	どちらとも いえない	あまり不安で はなかった	全く不安で はなかった	合計
①自宅を留守にしている間の 雪処理	0 (0.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (60.0%)	5 (100.0%)
②自宅を留守にしている間の 防犯	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)	5 (100.0%)
③ご先祖（仏壇など）を おいて家を空けること	0 (0.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (60.0%)	5 (100.0%)
④他人と一緒に共同生活を 送ること	0 (0.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (80.0%)	5 (100.0%)
⑤居住施設への引っ越し、 荷物の搬入	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	4 (80.0%)	5 (100.0%)
⑥居住施設の設備、備品の用意	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)	5 (100.0%)
⑦居住施設の雪処理	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)	5 (100.0%)
⑧家族や親族の理解、協力	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)	5 (100.0%)
⑨食事の用意	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)	5 (100.0%)
⑩実験（冬期居住）に伴う 金銭的な負担	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)	5 (100.0%)
⑪通院や買い物などの外出の 手段	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)	5 (100.0%)

問5 実験の全体的な満足度

満足	5	(100.0%)
やや満足	0	(0.0%)
どちらともいえない	0	(0.0%)
やや不満	0	(0.0%)
不満	0	(0.0%)
合計	5	(100.0%)

問6 居住施設に関する満足度

	満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満	合計
①施設の場所・位置	3 (60.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
②住みやすさ（快適性）	5 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
③共同スペースの使いやすさ	5 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
④部屋の広さ	5 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
⑤部屋の設備・備品	4 (80.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
⑥部屋の使いやすさ	4 (80.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)

問7 各実験内容に関する満足度

	満足	やや満足	どちらとも いえない	やや不満	不満	合計
①人と交流する機会 (回数や頻度)	5 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
②交流の内容	3 (60.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
③食事の提供(朝食、夕食)	5 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
④留守宅の見まわり	4 (80.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
⑤留守宅の雪処理	1 (20.0%)	0 (0.0%)	4 (80.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
⑥外出の支援(相乗り、送迎)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	3 (60.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
⑦冬期居住施設の管理・宿直	5 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)

問8 冬期居住を行う場合、必要な取組・サービス

	必要	やや必要	どちらとも いえない	あまり 必要ない	必要ない	合計
①自宅(留守宅)の管理・確認	4 (80.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
②自宅(留守宅)の雪処理	3 (60.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
③居住施設の雪処理	3 (60.0%)	0 (0.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
④居住施設内の共同スペースの 設置	5 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
⑤今住んでいる集落の人との 交流	5 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
⑥今住んでいる集落以外の人 との交流	5 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
⑦民生委員、保健師等の訪問	5 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
⑧食事の提供	3 (60.0%)	1 (20.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
⑨外出時の支援サービス (移送・相乗り)	2 (40.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	1 (20.0%)	5 (100.0%)
⑩買い物サービス (宅配・代行・移動販売)	2 (40.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	1 (20.0%)	5 (100.0%)
⑪自宅への一時帰宅	2 (40.0%)	1 (20.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	5 (100.0%)

問9 将来、一冬を通じて冬期居住したいか

ぜひ冬期居住したい	2	(40.0%)
自宅での冬の生活が体力的に困難になったら冬期居住したい	0	(0.0%)
条件が合えば冬期居住したい	3	(60.0%)
わからない	0	(0.0%)
冬期居住はしない	0	(0.0%)
合計	5	(100.0%)

(当てはまる条件)

※問9で「条件が合えば冬期居住したい」と回答した人を対象

施設の場所・位置	2	(66.7%)
施設の住みやすさ	1	(33.3%)
冬期居住にかかる費用負担	3	(100.0%)
居住期間中のサービス内容	3	(100.0%)
家族や親族の理解	0	(0.0%)
その他	1	(33.3%)
	3	

【その他の条件】

- ・体調

問10 1ヶ月当たりの入居料（1人分、ただし食費・光熱費は除く）

1万円まで	1	(20.0%)
2万円まで	2	(40.0%)
3万円まで	1	(20.0%)
5万円まで	1	(20.0%)
それ以上	0	(0.0%)
合計	5	(100.0%)

問11 食事サービスを受ける場合の朝昼夜1回当たりの費用（1人分）

	200円まで	300円まで	500円まで	800円まで	1,000円まで	それ以上	計
【朝食】の場合	2 (40.0%)	2 (40.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
【昼食】の場合	0 (0.0%)	4 (80.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)
【夕食】の場合	1 (20.0%)	1 (20.0%)	1 (20.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)

問12 自由記入

- ・トイレは部屋に付いていたので、とてもよかった。
- ・高齢の人はベッドがあるといいのではないか。
- ・携帯電話があるため電話の不便はないが、忘れ物を時々自宅に取りに帰った
- ・あまり人にやってもらいすぎると自宅に戻った時の生活が不安（特に食事）である。

②入居者座談会の結果

大町市美麻地区における冬期居住実験の入居者を対象に、実験期間中の行動、実験の満足度・効果、将来の冬期居住の意向、今回の経験を踏まえた提案等を把握するため、以下のとおり、座談会（ヒアリング）を実施しており、その結果について以下に整理する。

【調査概要】

- ・調査日時：平成22年2月24日 9:00～10:30
- ・調査方法：冬期居住施設にて入居者に座談会形式でヒアリングを実施した。
- ・調査対象：冬期居住施設の入居者 6人（5世帯）



【入居者座談会の要旨】

i) 実験の満足度、効果

〔留守宅の管理、除雪について〕

- 自宅にはこれからも住み続けるため、施設にいても自宅の雪のことは心配である。
- 見回りをお願いしてあっても、留守宅の状況は実際に目で見て確認したいという思いがある。
- 住宅の屋根は落雪型にしてあるが、倉庫やビニールハウスなどは雪下ろしの必要があり、そちらが心配である。

〔交流について〕

- 入居者同士で普段は顔を合わせることはあってもゆっくりと話す機会がなかったが、今回、多くの会話ができて、親近感を持つようになった。
- 一緒に過ごし、家族のような楽しい経験をしたことで、実験後も入居者同士で行き来するようになるのではないかと。
- 施設の来訪者も多く、ここで話したことが今後枝葉のように広がっていくのではないかと。
- 朝夕の食事を一緒にとることが、居住者同志の交流・親睦にはよかった。
- 保健師に来てもらった際の栄養の話はとても勉強になった。こうすればよいというアドバイスが役に立った。
- 診療所の先生には、集落で人を集めてくれれば、行って話をしたいと言ってもらったので、地区に戻ったら集落の人たちに話をしてみたい。
- 多くの初体面の人と出会うことができた。

〔施設での生活について〕

- 施設の個室はほとんど寝るだけで、みんなで共同スペースにいることが多かった。
- 高齢者の一人暮らしで家全体を暖めるのは無駄が伴う。居住施設は全体が暖かくてよかった。
- 高齢になると、機器が変わると使いにくく感じるが、今回置いてあった洗濯機は使いやすく、洗濯場も乾きやすくてよかった。
- 全般的に設備はよかった。

〔食事サービスについて〕

- 提供された料理は身近な食材を使っており、今後の生活で作れそうなものもあって参考になった。
- 昼食は、最初の2日間は各自でとっていたが、その後は一緒に食べるようになった。
- 自分で食事を作ると塩分をとりすぎるが、ここでの食事は看護師にもほめられた。
- 提供される食事は、誰がどうやって作るのかがわかり、料理しているところも見えるので安心である。配食サービスとは大きく違う。

ii) 実験への当初の心配と実験後の感想

- 施設で生活することには不安はなかったが、留守宅のことは心配であった。
- ペットを飼っている人もいるので、連れて来られないことが問題になる人もいるのではないかと。
- ペットは自分の家でなければストレスを感じてしまうことも多く、自分でも留守にする時は預けるのではなく、面倒を見てもらうように頼んでいる。

iii) 必要と考えられる取組やサービス

- 雪処理をせずにすむということはいい。
- 昼で寝ると起きるのが大変なため、ベッドの方がよかった。
- トイレに手すりと非常ブザーがあると安心である。

iv) 将来の冬期居住への意向、費用負担

- 居住者の満足度を上げるためにはそれなりに費用が必要になる。
- 費用の自己負担が心配であり、自宅での生活と大きく変わらない程度の支出が最低限の目安となる。年金生活のため、その受給額の範囲内で生活できる負担額でないと難しい。
- 冬期居住中に留守宅を使わなくても基本料金が生じてしまうが、それは固定料金であり仕方がない。

v) 今後の取組に向けた提案、課題

- 社会福祉協議会の住民支え合いマップの説明を聞き、今回の冬期居住とうまく重ね合わせるができないかと思った。
- もし冬期居住施設をつくったとしても、入居者数には限りがあり、一般の人が納得できる基準が必要ではないか。
- クラインガルテンの利用方法として、雪のない季節だけ貸して、冬期間はこうした冬期居住の取組に利用するという考えもあるのではないかと。
- 美麻地区の場合、冬期居住に3、4ヶ月も必要はなく、一番雪が多い1ヶ月間だけでもよいのではないかと。
- 介護を受ける必要はないが若くもない、中間の人たちにとって、こうした生活ができれば、より一層元気が出るのではないかと。

vi) その他

- 美麻地区を終の棲家と決めて移住してきたのだが、今回はそれが実際にできるかどうかを試す機会にもなった。
- 元気なうちにこうした生活を経験しておく、自力での生活が困難になる前に自分で判断できるのではないか。
- このような生活は体験してみると良さが分かるのだが、いきなり話で聞くとなかなか理解できないのではないか。
- これまで行政では、介護が必要になるまで手をさしのべてくれなかったので、今回のような取組はありがたかった。
- 一人で暮らしているとマンネリになってくるが、ここでの生活が刺激になった。
- 実験が終わって、また一人の生活にもどることが少し不安である。
- 自分のことは自分でできる人でなければ、こうした生活は難しいのではないか。

③行政ヒアリング要旨

冬期居住に関する問題、改善点、行政からみた効果、今後の課題・方向性等を把握するため、実験期間終了後、行政担当者に対してヒアリングを実施しており、その結果について以下に整理する。

【行政ヒアリングの要旨】

i) 地域住民に対する冬期居住実験への参加協力時の支障

- 入居候補者が集落で委託を受けて行っている県道の歩道除雪を行うことになった。
- 入居候補者が体調を崩した。施設での階段の上り下りが困難になった。
- 家の中で飼っているペットがいる。
- 植物の手入れが必要である。
- 3、4日間ならよいが、10日間では長い。
- 夏に話した時にはいいと言っているが、冬になると出不精になる。
- 人間関係の問題。
- デイサービスや介護の宿泊体験と勘違いされるなど、高齢者に言葉だけで伝えることは難しい。

ii) 実験で苦労した点、問題点、改善点

- どのような人が入居者になるのかなかなか分からず、準備段階で何をすればよいか困った。
- 高齢者ばかりの地区も多く、留守宅の見回りなどを行う人の確保が大変であった。
- 施設の管理についても、通常とは異なる体制となるため、他の仕事をしながら関わってもらわなければならない、宿直などの人の確保と配置するためのやりくりが大変であった。
- 書類のやりとりや手続きにかかる時間が事前に把握できていなかった。
- 昼食のための厨房や洗濯機の設置など、進めていくうちに気が付いたものも多く、準備しておくことや必要なものなど模索しながらであった。
- 協力してくれた美麻地域づくり会議の担当者が自ら考え動く人だったため、実験が比較的順調に進んだ。

iii) 市町村としての実験の成果・効果

- 今回の施設は、居住用ではないため、手すりやスロープなど対応が十分ではないが、実験を通じてかなり改善することができた。
- 一度途切れた地域の文化（麻づくり）について、この機会を利用して、入居者などの話を記録することができた。
- マスコミに取り上げられたことで、大町市や美麻地区のPRになった。
- 保健師によれば、一人暮らしの高齢者の偏りがちな食事が、10日間でもきちんとした食事をとれてよかったということである。
- 留守宅の見回り、施設の宿直、食事作りなど雇用が増える素地ができた一方で、実際に行うためにはそれなりの費用が必要なことも分かった。

iv) 施策として検討・展開していく上での課題

- ふたえ市民農園交流促進センターは高齢者用に造られたものではないため、この施設で冬期居住を進めるのであれば高齢者が居住しやすいように対応させる必要がある。
- 参加者を増やすためには、実際に体験してもらえるといいのではないかと。
- 美麻地区の場合は、地域や家に愛着があり、集落全体での冬期居住は難しいのではないかと。

- 今後も美麻地区で冬期居住を行う場合は、美麻地域づくり会議との協働が必要と考えている。
- 入居者は昼間は時間に余裕があるので、手頃な仕事等があるといいのではないかと。

v) 今後の方向性

- 今回の居住者が体験を話すことで、理解してくれる人が増えることを期待する。
- 個人的には、美麻地区に限定せず、大町市の中心市街地の空き店舗を活用して、市内の雪の多い地区の高齢者を対象に冬期間は中心部に出てきて住んでもらい、市としてしっかりとした体制がとれると、雪国で暮らし続ける手助けになるのではないかと。
- 中心市街地活性化や I ターン者の受け入れ、冬期居住など、複合的な目的をもって進めていく必要があるのではないかと。

vi) 望まれる支援制度

- 中心市街地活性化の補助金等と組み合わせて、冬期居住施設等のハード整備・改修ができるとうい。
- 冬期居住だけを目的とした施設では、雪のない期間の利用や維持・管理が問題となってくる。

(5) 実証実験の成果と今後の課題・方向性

大町市美麻地区で実施した冬期居住の実証実験について、本節で整理した内容に基づき、入居者、地域コミュニティ、行政のそれぞれの立場から成果（効果等）を整理すると、図表 4-23 に示すとおりである。

図表 4-23 各主体の立場からみた実証実験の成果

主体	効果・メリット等	大変さ・デメリット等
入居者	<ul style="list-style-type: none"> ・入居者全員が実験に満足であった。 ・日々の除雪作業から開放された。 ・複数の入居者との共同生活により、日常生活におけるコミュニケーションが活発になり、閉じこもりがちな冬の生活のさびしさや不安が解消された。 ・通常の施設利用者とも歓談することができた。 ・身近な食材を使った安心な食事をしっかりととることができた。 ・保健師、診療所の医師の訪問・助言が自分の健康維持に役立った。 ・暖房の効いた施設で快適な生活を送ることができた。 ・施設には 24 時間体制で管理人がいて、とても安心だった。 ・元気なうちに冬期居住を経験することができ、自分の将来の生き方を考えるよい機会となった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・冬期居住していても留守宅の様子が気になる。雪の状況は自分の目で実際に確認したい。 ・ペットや植物が持ち込めない。 ・足腰の弱っている人には、階段の上り下りが大変である。
地域コミュニティ	<ul style="list-style-type: none"> ・今後、各集落において、入居者との会話・交流を通して、冬期居住という考え方や生活の利点等が広まっていくことが期待される。 	—
行政	<ul style="list-style-type: none"> ・既存交流施設における閑散期の新たな活用方法を見出すことができた。 ・一度途切れた地域の文化（麻づくり）について、入居者から話が聞けた。記録に残すこともできた。 ・冬期居住を実施するためのノウハウを蓄積することができた。 ・冬期居住の実践事例ができ、地域で広める際に大いに役立つ。 ・マスコミに多数報道され、大町市や美麻地区の PR になった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉だけで冬期居住について地域住民から理解・協力を得るのは難しい。 ・デイサービスや介護の取組と誤解されたこともあった。 ・入居者の留守宅を見回る人や実験のための施設の管理者（日勤・宿直）を確保するのが大変だった。 ・実験期間中は雪がほとんど降らず、留守宅の見回りや雪処理の検証が十分にできなかった。

また、本実験を通して、冬期居住のあり方や進め方等について検討する上で、次のような知見を得ることができた。

<冬期居住に関する主な知見>

- 住民は冬期に長期間自宅を空けることが不安であり、留守宅の見回りや雪処理支援と冬期居住を一体的に進める必要がある。
- 入居者は冬期居住をしていても留守宅の様子が気になる。雪の状況は自分の目で実際に確認したいという思いがあり、入居者が希望するときに自宅の様子を見に行けるような配慮が必要である。
- 複数の入居者が個室を確保した上で共同生活を送るという方式が有効だった。入居者が集うための共有スペースの存在が重要であり、日常生活におけるコミュニケーションが活発になって、入居者は楽しく充実した日々を送ることができる。
- 既存の交流施設を活用する場合、入居者と一般の施設利用者として自然発生的なコミュニケーションが生じやすく、冬期居住を行う上で効果的である。
- 身近な食材を使って冬期居住施設で調理した食事（朝食・夕食）を提供し、全員そろって食べることが入居者の満足度を高める。
- 保健師、民生委員、診療所の医師、行政職員などによる訪問、会話、健康確認が望ましい。
- 今回のように入居者による除雪作業が不要な冬期居住施設が理想的である。
- 共同生活の場合、ペットや植物を持ち込めないなどの理由で断念するケースが発生しうる。
- 地域の高齢者に対しては、元気なうちに冬期居住を体験することができると、自分の将来の生き方を考える上でよい機会となるため、体験できる機会を提供できるとよい。
- 入居者に「手ごろな仕事」等が提供できるとよい。

今回の冬期居住実験において、大町市（美麻支所）が最も苦勞した点は、中川町と同様に、入居者（実験協力者）の確保である。住民は冬期に自宅を離れることに強い抵抗感があること、現時点でその必要性を感じていないことなどが主な理由であるが、他にも体調面での不安、ペットや植物の世話といった理由もあった。

今回の冬期居住実験における最大のポイントは、ふたえ市民農園交流促進センターという恵まれた施設を利用できたことであろう。居住環境に対する入居者の評価は極めて高く、入居者同士の共同生活や様々な人との交流、食事の提供等において高い効果が得られたのもこの施設によるところが大きい。また、地元自治会と連携した留守宅の見守りと雪処理も実証実験の大きなテーマであったが、実験期間中ほとんど降雪がなかったため、十分な検証ができず、今後の課題である。

大町市では、次年度以降も今回の方法で冬期居住を実施するかどうかはまだ検討段階であるが、幸い今回の入居者は美麻地区内の5つの集落から集まっており、入居者を通じて各集落から今回の実験の内容や効果が広がっていくことを期待している。

大町市は今回の実験を通して、冬期居住を実施するための知見やノウハウを蓄積することができた。地域住民へのさらなる情報発信と意識啓発が重要であるが、地域の高齢者等に対しては、いきなり本格的な冬期居住を呼びかけるより、健康で元気なうちに将来に備えて「お試し体験」をしてもらうような取組も望まれる。また、冬期居住施設として交流促進センターを利用する場合の適切な入居料（自己負担額）の設定も課題となろう。

本実験は美麻地区を対象に実施したが、大町市全域を対象に、中心市街地の空き店舗等を活用して、周辺部の雪の多い地区に住む高齢者世帯が冬期居住するといった展開も可能性として考えられ、その際にはIターン者の受け入れや中心市街地の活性化など複合的な目的を視野に入れて検討を進めていくことが期待される。

信濃毎日新聞
平成 21 年 9 月 10 日 (木)
朝刊

豪雪地帯 冬は共同生活

豪雪地帯にある集落の住民が、冬季に自宅とは別の場所ですべて共同生活をする実証実験が大町市美麻地区で行われることが決まった。雪かきの負担軽減や過疎地の集落維持などを狙いとして、国土交通省が同市など2カ所で実施する。同市が9日の市議会本会議で明らかにした。

大町

市などによると、実証実験は来年1～2月に10日間ほど行う。美麻千見地区の一人暮らしのお年寄りなどに協力を求め、5世帯ほどの参加を予定している。共同生活をする建物は、美麻地区内にある市民農園の交流促進センター（木造2階建て）。2階に居室が6部屋、1階に食堂や共用スペースが

5世帯ほど参加 国交省が来年実験

ある。国交省から委託を受けた日本システム開発研究所（東京）が調査を担当。参加者が通院や買い物で外出する際の送迎方法、日用品や食料品の買い物はどうするかといった共同生活の課題を探る。国交省地方振興課は「共同生活をする場合に住民が一番不安を感じるの、留守宅の維持管理をどうするか」と指摘。実験では、自治会などに協力を仰ぎ、留守宅の雪かきやパトロールなどが可能かどうかを検証する。同省は、実証実験を参考にして、集落全体が冬季の一定期間を共同で生活できるか探るといふ。他県では、屋根の雪下ろしや道路の雪かきを住民が担う方法についての実証実験を予定している。

産経新聞
平成 22 年 1 月 14 日 (木)
朝刊

「冬場は共同生活」大町で実験

〈長野〉豪雪地帯で暮らす高齢者の雪かきなどの負担を軽減するため、2月に大町市で高齢者同士が共同生活を営みながら助け合っていく、新たな暮らし方を探る実験が行われる。この実験は、国土交通省が「雪国の豊かな暮らし継承方策調査」として、今年度大町市と北海道中川町の2カ所で初めて行うもの。同省地方振興課によると、高齢者の雪かきによる転落事故が後を絶たないことや、過疎化による地域コミュニティの衰退などを受けて、高齢者の安全な冬期間の暮らし方を探るといふ。

大町市によると、実験は2月15日から24日までの9泊10日間の日程で、宿泊施設を備えた「美麻交流促進センター」（同市）で行われる。美麻地区の住民で5世帯7、8人が参加の予定で、参加者は60代～70代の単身者や夫婦だといふ。

実験では、参加者に居住のための個室がそれぞれ割り当てられる。炊事場や入浴施設は共同利用となり、参加者同士が共同生活を営めるかを検証する。また、病院に通院する際のバスの送迎や、農協による食料品の移動販売、保健師による体操なども実施される。

一方、共同生活を実施する上で、留守宅の維持管理が問題となるため、地区の住民を中心に雪かきや家のパトロールも実施する。

大町市では、共同生活の実験で浮かび上がる課題点を元に、将来的には市街地に共同生活ができる場の提供も視野に入れている。

大系タイムス
平成 22 年 2 月 7 日 (日)

信濃毎日新聞
平成 22 年 2 月 16 日 (火)
朝刊



お年寄りが集団生活する施設

期間中と実験終了後、高齢者や地域住民から、課題などを聞き取り調査。コストや効果を検証し、事業化の

国土交通省は15日か、冬期の住まい方に関する実証実験を、負担が大きい冬の一定

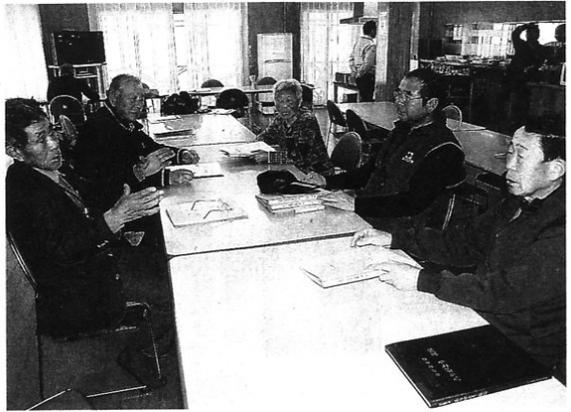
雪国の豊かな暮らし 国交省が美麻で実証実験

期間に、お年寄りの他地域への移住を実験し、雪国の高齢者の安心安全な生活を探る。

必要性を検討する。国交省は「雪国の豊かな暮らし継承方策調査」の一環として実験を実施。「冬の住まい方」と「郷土による地域除雪」を柱に、各2か所ずつ全国の雪国で、調査を行う。

実験を受け持つ財団法人・日本システム開発研究所の「諸橋和行氏は「高齢化が進むなか、地域の高齢者の雪

処理が難しくなっている。地域に住み続けたお年寄りのため、可能性を探っていた」と話した。



9泊10日の共同生活に集まった美麻地区の住民

積雪期の共同生活スタート

積雪地帯に住む高齢者が、冬季に自宅とは別の場所で共同生活する国土交通省の実証実験が15日、24日まで9泊10日の日程で大町市美麻地区で始まった。同地区に住む一人暮らしの4人と、夫婦1組が参加。市民農園の宿泊施設に泊まりながら、調査機関の聞き取り調査などに応

大町市美麻で6人

国交省の実証実験

参加者には世帯ごとに8畳の個室が割り当てられた。1泊2食付きで、食費の一部を自己負担する以外は無料。昼食は自炊したり、弁当を取り寄せたりする。期間中、保健師による血圧測定や、健康体操の時間もある。自宅は、自治会の人

が見回り、玄関前の雪かきを予定だ。この日夕方は、宿舎となった「ふたえ市民農園」の管理棟に参加者が集まった。一人暮らしの岡野子さん(81)は「息子たちが市街地に住んでいて普段は生活に困らないが、面白い企画なので参加してみようと思いました」。「冬を共同生活で乗り切ろう」という考えは良いと思うが、年金生活なので、お金がかかるような仕組みでは難しい」と話す人もいた。実証実験を受託した財団法人日本システム開発研究所(東京)は期間中、共同生活の感想や、工夫が必要な点などについて聞き取り調査をする。同研究所の担当者は「雪かきが重荷になって、愛着がある地域を去っていく高齢者も多い。雪の時期を気にせずに暮らし続けられる方法を探りたい」と話している。

信濃毎日新聞
平成 22 年 3 月 1 日 (日)
朝刊

豪雪地 大町市美麻で実験

高齢者共同生活 課題も浮き彫り



保健師を交えゲーム形式の健康体操を楽しむ冬期居住実験の参加者＝2月23日

「親しくなれた」好評

レポート

雪の多い冬の時期は自宅を離れて共同生活し、雪が消えたら帰宅して愛着のある地域に住み続ける。豪雪地の高齢者がそんな暮らし方が可能かどうかを探ると、国土交通省が「雪の多い冬の時期は自宅を離れて共同生活し、雪が消えたら帰宅して愛着のある地域に住み続ける。豪雪地の高齢者がそんな暮らし方が可能かどうかを探ると、国土交通省が

「いろいろな会話をするので日本語を思い出すよ」。居住実験9日目の2月23日。会場となった美麻地区の「ふたえ市民農園」管理棟に保健師が訪れ、6人の血圧を測ったり、健康体操を教えたりすると、参加者からは冗談が飛び、笑い起きた。

参加したのはいずれも地区内に住む60代、80代の男性4人と女性2人。管理棟は農園利用者の交流や招待者の宿泊の山中腹にある。戦前は17軒の集落だったが、昭和30年代ころから年々減り、今は1軒。農業を営む一人暮らしの西沢さんは「先祖の墓があるので寂しくはない。ここに住み続けたい」と話す。

朝夕の食事の時間が決まっている以外は、生活は自由だ。「子どものころの思い出や孫の話をする中で、お互いが親しくなれた」と西沢さん。「体の自由が利く間は、こうした暮らし方を取り入れた方がいい」と評価した。

実験最終日、「将来、共同生活してみたいか」との国交省側の問い掛けに、参加者からは「ぜひやりたい」「条件が合えば参加したい」と前向きな回答が返った。ただ、条件に手が届かないのはやはり費用だった。

今回は実験のため、朝夕の食事代（1日500円）以外は無料。参加者の大塚誠さん（71）は「各地で行うなら、老

を目的とする市の施設で、1軒の集落だったが、昭和30年代ころから年々減り、今は1軒。農業を営む一人暮らしの西沢さんは「先祖の墓があるので寂しくはない。ここに住み続けたい」と話す。

居住実験は快適だったようだが、「子どものころの思い出や孫の話をする中で、お互いが親しくなれた」と西沢さん。「体の自由が利く間は、こうした暮らし方を取り入れた方がいい」と評価した。

実験最終日、「将来、共同生活してみたいか」との国交省側の問い掛けに、参加者からは「ぜひやりたい」「条件が合えば参加したい」と前向きな回答が返った。ただ、条件に手が届かないのはやはり費用だった。

今回は実験のため、朝夕の食事代（1日500円）以外は無料。参加者の大塚誠さん（71）は「各地で行うなら、老

共同生活参加者の1日 (2月23日)

午前	5時	起床
	6時	全員で朝食
	7時半	保健師の健康指導
	10時	焼きおにぎりを作り昼食
午後	1時	医師が診察に来訪
	4時	調査員が聞き取り調査
	6時半	全員で夕食
夜		それぞれ就寝



宿舎となった「ふたえ市民農園」管理棟

費用や動植物の世話 心配

実験最終日、「将来、共同生活してみたいか」との国交省側の問い掛けに、参加者からは「ぜひやりたい」「条件が合えば参加したい」と前向きな回答が返った。ただ、条件に手が届かないのはやはり費用だった。

今回は実験のため、朝夕の食事代（1日500円）以外は無料。参加者の大塚誠さん（71）は「各地で行うなら、老

費用や動植物の世話 心配

実験最終日、「将来、共同生活してみたいか」との国交省側の問い掛けに、参加者からは「ぜひやりたい」「条件が合えば参加したい」と前向きな回答が返った。ただ、条件に手が届かないのはやはり費用だった。

今回は実験のため、朝夕の食事代（1日500円）以外は無料。参加者の大塚誠さん（71）は「各地で行うなら、老

